

東京国立文化財研究所要覧

1989

平成元年度

は じ め に

昭和64年1月改元が行われ、平成という新しい時代に突入した。その元年にあたって、特別研究として「文化財の伝統的保存修復材料に関する研究」を発足させ、従来の2件と併せて3件の特別研究を進めた。

国際交流事業としては、例年通り、外国人研究者8名を招き第13回国際シンポジウムを「金属文化財の保存と修復に関する今日の問題」というテーマのもとに実施し多大の成果を取めたほか、引続き敦煌研究院との間に「敦煌文化財保存修復に関する研究協力」の一環として相互交流を行い、共同研究の実を高めるにいたった。なお、本年度から新たに「アメリカ・スミソニアン研究機構との国際研究交流」の予算が認められたので、研究交流委員会を発足させるとともに、科学研究費（海外学術調査）によって双方の研究者の交流をはかり共同研究を開始した。

また、国際交流事業に関連して、当研究所をアジア文化財保存修復協力センター（仮称）として位置づけるための調査費が認められたので、調査研究会を発足させ活動を開始したことも特筆すべきことといえよう。

懸案となっている研究所の新営については、実施設計が認められず、実施設計準備として少額が認められたため、予定地内の試掘及び小規模発掘調査を実施し遺跡等の確認を行うにとどめざるをえなかった。

終わりに本年度は伊原修復技術部長を定年で見送ることになったが、その労苦に敬意と謝意を表する次第である。

平成3年2月

東京国立文化財研究所長

濱 田 隆

目 次

I. 沿 革	1
1. 設 立 の 経 緯	1
2. 年代別重要事項	1
3. 歴 代 所 長	5
II. 機構・職員・予算	6
1. 機 構	6
2. 職 員	7
3. 名 誉 研 究 員	10
4. 予 算	11
5. 特別研究一覧	12
6. 科学研究費補助金交付一覧	12
7. 受託研究一覧	13
III. 調 査 研 究	14
中長期研究計画一覧	14
1. 美 術 部	15
(1) 概 要	15
(2) 各 論	16
2. 芸 能 部	19
(1) 概 要	19
(2) 各 論	20
3. 保 存 科 学 部	22
(1) 概 要	22
(2) 各 論	24

4. 修復技術部	32
(1) 概 要	32
(2) 各 論	33
5. 情報資料部	43
(1) 概 要	43
(2) 各 論	44
6. 国際調査研究	49
7. 主要研究業績	50
IV. 事 業	64
1. 出 版	64
(1) 美術研究	64
(2) 日本美術年鑑	64
(3) 芸能の科学	65
(4) 保存科学	65
2. 黒田清輝巡回展	66
3. 公開学術講座	66
4. 夏期学術講座	67
5. 博物館・美術館等の保存担当学芸員研修	68
6. 会 議	70
7. 国際・国内交流	73
(1) 職員の海外渡航	73
(2) 海外研究者の来訪	75
(3) 招へい研究員	76

V. 研究施設・設備	77
1. 蔵 書	77
2. 資 料	78
3. 黒田記念室	79
4. 閲 覧 室	79
VI. 関係法規	80

I. 沿 革

1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、昭和27年4月1日発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選定を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原隼二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、また、わが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

昭和 元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が設備され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・岡田三郎助・岡田英作・同藤島武二及び大給近清、建築造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同 年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した（本館）。

同 3年9月 前記の建物が竣工したので、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また、館内に黒田子爵記念室を設け、同子爵の作

沿 革

品を陳列した。

同 4年5月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。

同 5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。

同 年10月17日 美術研究所開所式を挙行了。

同 7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。

同 年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。

同 5年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。

明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。

同 9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。

同10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。

同 年4月 『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。

同 年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。

研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。

同12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。

同 年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。

同13年2月12日 木造、平屋建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。

同19年8月10日 黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

同20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同 年7～8月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

- 同21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。
- 同 年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し引揚げを完了した。
- 同 年4月16日 東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。
- 同22年5月1日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。
- 国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた。（保存科学部の前身）。昭和23年度より専任の職員を配置し研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室（66㎡）に設けた。
- 同25年8月29日 文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。
- 同 年8月29日 文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。
- 同26年1月31日 美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。
- 同27年4月1日 文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。
- また、文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。
- 同年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。
- 同28年4月26日 保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。
- 同29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。
- 同32年3月22日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平家建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。

沿 革

同 年11月30日 従来の2階建書庫のうえにさらに1階を増築3階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。

同34年4月30日 東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。

同36年9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。

同37年3月31日 東京国立博物館構内に保存科学部庁舎(保存科学部実験室)として、鉄筋コンクリート造2階建延面積663㎡の建物1棟が竣工した。

同 年7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。

同 年7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。

同43年6月15日 文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。

同44年8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎(延1,950.41㎡)の起工式が行われた。

同45年3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行われた。

同 年3月25日 芸能部は、別館3階に移転した。

同 年5月8日 保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を完了した。

同 年6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が完了した。

同 年11月2日 所長および庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転した。(本館は、美術部庁舎となる)したがって研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。

同46年4月1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658㎡を東京国立博物館から所管換された。

同48年4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が

置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。

同52年4月18日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室および写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。

同53年3月20日 本館構内の写場等（木造平家建延面積144㎡）を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積565.95㎡の建物が竣工した。

同53年4月5日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。

同59年6月28日 文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。

3. 歴代所長（昭和5年～平成2年）

主 事 正 木 直 彦 （昭和5. 6. 28～昭和6. 11. 24）

主 事 矢 代 幸 雄 （昭和6. 11. 25～昭和10. 5. 31）

所長事務取扱 和 田 英 作 （昭和10. 6. 1～昭和11. 6. 21）

所 長 矢 代 幸 雄 （昭和11. 6. 22～昭和17. 6. 28）

所長事務取扱 田 中 豊 蔵 （昭和17. 6. 29～昭和22. 8. 15）

所 長 田 中 豊 蔵 （昭和22. 8. 16～昭和23. 5. 10）

所 長 代理 福 山 敏 男 （昭和23. 5. 11～昭和24. 8. 30）

所 長 松 本 栄 一 （昭和24. 8. 31～昭和27. 3. 31）

所長事務代理 矢 代 幸 雄 （昭和27. 4. 1～昭和28. 10. 31）

所 長 田 中 一 松 （昭和28. 11. 1～昭和40. 3. 31）

所 長 関 野 克 （昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1）

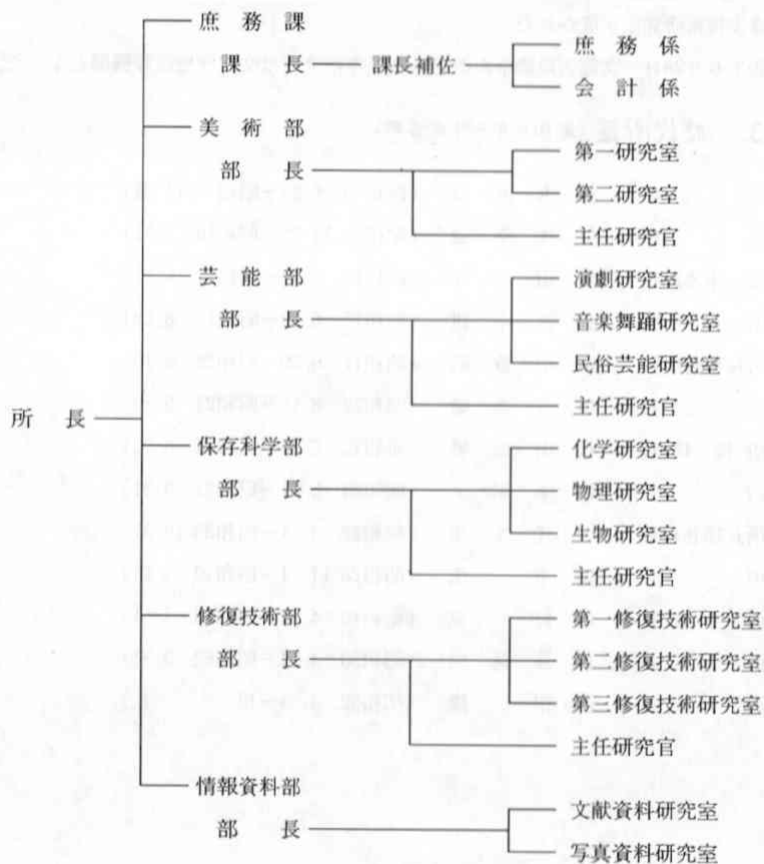
所 長 伊 藤 延 男 （昭和53. 4. 1～昭和62. 3. 31）

所 長 濱 田 隆 （昭和62. 4. 1～現在）

Ⅱ. 機構・職員・予算

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成およびその公表を行うことを目的として設立された文化庁の施設等機関である。その機構等は次のとおりである。

1. 機 構



2. 職 員

(平成2年3月30日現在)

所 属	職 名	氏 名	
所 長	所 長	濱 田 隆	(美術史)
庶 務 課	課 長	最 所 親 志	
庶 務 係	係 長	江 原 勉 勉	
	庶 務 主 任	大 堀 岳 満	
	事 務 補 佐 員	中 村 節 子	
	〃	伊 藤 百 合 子	
	〃	白 井 久 美 子	
	技 能 補 佐 員	浅 井 美 由 起	
	調 査 員(非)	松 原 美 智 子	
会 計 係	係 長	長 谷 川 憲 康	
	係 員	相 澤 か ず 子	
	〃	鈴 木 秀 樹	
	事 務 補 佐 員	志 村 浩 美	
	〃	宮 崎 章 子	
	技 能 補 佐 員	遠 田 由 太 郎	
	労 務 補 佐 員	菊 地 廣 吉	
美 術 部	部 長	関 口 正 之	(日本仏教絵画史)
第一研究室	室 長	三 宅 久 雄	(日本彫刻史)
	主 任 研 究 官	鈴 木 廣 之	(日本近世絵画史)
	研 究 員	井 上 一 稔	(日本彫刻史)
第二研究室	室 長	三 輪 英 夫	(日本近世・近代絵画史)
	研 究 員	佐 藤 道 信	(日本近代絵画史)
	〃	山 梨 絵 美 子	(日本近代絵画史)
芸 能 部	部 長	佐 藤 道 子	(寺院芸能)
演劇研究室	室 長	羽 田 昶	(日本中世演劇)
	主 任 研 究 官	鎌 倉 恵 子	(日本近世演劇)
	調 査 研 究 員(非)	広 瀬 美 都	(日本東洋音楽史)
音楽舞踊研究室	室 長	蒲 生 郷 昭	(日本音楽史)
	調 査 研 究 員(非)	九 茂 美 恵 子	(舞踊学)
民俗芸能研究室	室 長	中 村 茂 子	(民俗芸能)
	調 査 研 究 員(非)	三 村 昌 義	(芸能史)

機構・職員・予算

所 属	職 名	氏 名	
保 存 科 学 部	部 長	馬 淵 久 夫	(同位体化学)
	化学研究室 室 長	平 尾 良 光	(無機化学)
	主任研究官	門 倉 武 夫	(分析化学)
物 理 研 究 室	室 長	三 浦 定 俊	(計測工学)
	主任研究官	石 川 陸 郎	(物理光学)
	研 究 員	佐 野 千 絵	(光化学)
生 物 研 究 室	室 長	新 井 英 夫	(微生物学)
	調査研究員(非)	山 野 勝 次	(応用昆虫学)
修 復 技 術 部	部 長	伊 原 恵 司	(建築史)
	第一修復技術研究室 室 長	中 里 壽 克	(日本工芸史)
	主任研究官	西 浦 忠 輝	(材質改良学)
第二修復技術研究室	室 長	増 田 勝 彦	(日本工芸史)
	研 究 員	川野邊 涉	(高分子工学)
第三修復技術研究室	室 長	青 木 繁 夫	(考古学)
情 報 資 料 部	部 長	鶴 田 武 良	(中国絵画史)
	文献資料研究室 室 長	米 倉 迪 夫	(日本中世絵画史)
	研 究 員	島 尾 新 良	(日本中世絵画史)
写真資料研究室	室長事務取扱	鶴 田 武 良	
	研 究 員	井 手 誠之輔	(東洋絵画史)
	々	長 岡 龍 作	(日本彫刻史)
	専 門 職 員	橋 本 弘 次	(美術写真)
	々	市 川 和 正	(々)
	々	野久保 昌 良	(々)

平成元年度における退職者

所 属	官 職 名	氏 名	在 職 期 間	備 考
庶 務 課	技 能 補 佐 員	浅 井 美由起	63.11. 7 ~ 2. 3.30	退 職
修復技術部	部 長	伊 原 恵 司	63. 4. 1 ~ 2. 3.31	〃

3. 名誉研究員

氏 名	退職時官職名	在 職 期 間	名誉研究員 発令年月日
白 畑 よ し		5. 6. 30～27. 8. 1	53. 10. 18
福 山 敏 男	美 術 部 長	23. 5. 11～34. 4. 15	〃
高 田 修	〃	27. 12. 1～44. 3. 31	〃
岩 崎 友 吉	修 復 技 術 部 長	27. 4. 1～49. 5. 31	〃
登 石 健 三	保 存 科 学 部 長	27. 10. 1～50. 4. 1	〃
岡 畏三郎	美 術 部 長	20. 5. 15～51. 4. 1	〃
中 村 傳三郎	美術部第二研究室長	22. 10. 1～53. 4. 1	〃
関 野 克	所 長	40. 4. 1～53. 4. 1	〃
秋 山 光 和	美術部第一研究室長	21. 10. 1～42. 2. 1	54. 10. 18
久 野 健	情 報 資 料 部 長	20. 5. 31～57. 4. 1	57. 10. 18
川 上 涇	美 術 部 長	21. 2. 28～57. 4. 1	〃
関 千 代	美術部第二研究室長	18. 12. 15～58. 4. 1	58. 10. 18
横 道 萬里雄	芸 能 部 長	28. 3. 16～51. 4. 1	59. 10. 18
上 野 ア キ	情報資料部文献資料研究室長	17. 11. 3～59. 4. 1	〃
江 上 綏	情報資料部主任研究官	38. 5. 18～59. 3. 31	〃
田 村 悦 子	美術部主任研究官	22. 6. 16～60. 3. 31	60. 10. 18
猪 川 和 子	情報資料部文献資料研究室長	22. 6. 27～60. 3. 31	〃
伊 藤 延 男	所 長	53. 4. 1～62. 3. 31	62. 10. 18
柳 沢 孝	美 術 部 長	27. 4. 1～62. 3. 31	〃
江 本 義 理	保 存 科 学 部 長	27. 4. 1～62. 3. 31	〃
宮 次 男	情 報 資 料 部 長	30. 9. 1～62. 3. 31	〃
三 隅 治 雄	芸 能 部 長	27. 10. 1～63. 3. 31	63. 10. 18
樋 口 清 治	修 復 技 術 部 長	37. 11. 1～63. 3. 31	〃
田 實 榮 子	美術部主任研究官	23. 3. 31～1. 3. 31	1. 10. 18
見 城 敏 子	保存科学部物理研究室長	34. 4. 1～1. 3. 31	〃

4. 平成元年度予算

() は補正後を表す

事	項	金 額
人件費		290,149 千円
運営費		(123,324) 127,872
事業管理		(32,642) 34,324
一般研究		(37,929) 39,301
特別研究		(44,578) 45,935
受託研究		(1,629) 1,629
文化財保護に関する国際交流		(6,546) 6,683
文化財保存修復に関する研究のための国際研究集会		3,314
招へい研究員		3,017
ローマセンター資料収集提供		352
文部省		
各所修繕		720
在外研究員旅費		5,567
	計	(419,760) 424,308

5. 平成元年度特別研究一覧

事 項	金 額
文化財の伝統的保存修復材料に関する研究	4,305 ^{千円}
敦煌文化財保存修復に関する調査研究	30,456
日本近代美術の発展に関する明治後半期の基礎資料作成	1,872
仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究	2,534
アジア文化財保存修復協力センター(仮称)設置のため調査	3,036
スミソニアン研究機構との国際研究交流	3,732
計	45,935

6. 平成元年度科学研究費補助金交付一覧

種 別	課 題 名	研究代表者	交 付 額
総合研究(A)	美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用	米 倉 迪 夫	4,700 ^{千円}
一般研究(A)	日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究	関 口 正 之	3,100
一般研究(B)	環境制御等による微生物被害防除法の開発	新 井 英 夫	900
〃	石質遺跡の新しい保存技術の開発に関する研究	西 浦 忠 輝	3,300
奨励研究(A)	菊池容斎の系譜の研究：日本美術院の歴史画と大和絵	佐 藤 道 信	900
〃	八・九世紀木彫像の再検討ー中国様式の受容と伝播という視点からー	長 岡 龍 作	800
試験研究(1)	埋蔵文化財の出土品の科学的保存に関する研究	新 井 英 夫	1,000
〃	古建築の保存を目的とした石材の凍結劣化防止法の規準化	西 浦 忠 輝	2,100
〃	プラズマ法による出土金属遺物の保存修復研究	青 木 繁 夫	3,700
国際学術研究	中国砂漠地帯における文化財保存のための自然環境に関する共同研究	伊 原 恵 司	2,000
〃	東アジア地域の古文化財(青銅器および土器・陶磁器)の保存科学研究	濱 田 隆	3,300
計			25,800

7. 平成元年度受託研究一覧

研 究 課 題	受 入 額
	円
横浜市三殿台遺跡の生物劣化防止の研究	301,070
トルコ、カマン・カレホユック遺跡出土金属製品の調査研究	392,700
瀧峯七曲り2号銅鐸の保存修復研究	497,420
風邪引き紙の保存研究	535,381
隈・西小田遺跡出土鉄戈・銅戈の保存修復研究	405,790
計	2,132,361

Ⅲ. 調査研究

中長期研究計画一覧

部 名	課 題 名	研究代表者	期 間
美 術 部	日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流 美術における地域性及び社会性の研究 美術に関する基礎資料の研究—絵巻資料、明治後半期美術資料及び関東所在墨画資料を中心として—	関 口 正 之 鈴 木 廣 之 三 輪 英 夫	昭63. 4 ～平 3. 3 平 1. 4 ～平 6. 3 〃
芸 能 部	仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究 寺院行事の研究 日本音楽各種目間の相互影響の研究 採り物の研究	佐 藤 道 子 〃 蒲 生 郷 昭 中 村 茂 子	昭63. 4 ～平 5. 3 昭60. 4 ～平 5. 3 平 1. 4 ～平 6. 3 昭61. 4 ～平 5. 3
保存科学部	有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の確立 特殊環境に置かれた文化財の保存条件の検討 フォクシングの保存科学的研究	三 浦 定 俊 石 川 陸 郎 新 井 英 夫	平 1. 4 ～平 7. 3 平 1. 4 ～平 9. 3 平 1. 4 ～平 5. 3
修復技術部	文化財の伝統的修復材料の研究（第1期） 屋外文化財の劣化過程の調査と修復法の開発	伊 原 恵 司 中 里 壽 克	平 1. 4 ～平 5. 3 平 1. 4 ～平 6. 3
情報資料部	美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として— 美術史における画像処理技術の応用に関する基礎的研究 日本・東洋美術史文献データベースの開発	鶴 田 武 良 鳥 尾 新 米 倉 迪 夫	平 1. 4 ～平11. 3 平 1. 4 ～平 6. 3 昭63. 4 ～平 6. 3

1. 美術部

(1) 概要

美術部は日本・東洋の古美術並びに日本の近代・現代美術とこれらに関連ある西洋美術についての基礎的調査研究を行い、かつその成果を公表することを目的としている。美術部は二室より構成され、第一研究室は古美術を担当し、第二研究室は近代・現代美術を担当している。

研究調査は各時代にわたり絵画・彫刻・工芸の各部門について、作品と文献資料との両面から実証的に進められており、共に基礎となる研究資料の作成と整理とに努めているほか、現代美術の動向に関する調査と資料収集をも平行して行っている。また、作品に関し、早くから実施してきた科学的な鑑識法を積極的に活用しているのも当部の特色である。さらに情報資料部所員とは研究や調査の面で緊密な協力が行われている。昭和63年度から3か年計画で始まった情報資料部と共同の特別研究「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」は平成元年度をもって調査と関係資料の収集を終えた。第二研究室では、昭和63年度より特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成」を4か年計画で開始し、新たに資料収集と研究調査を始めた。そのほか他機関との共同研究による広領域の研究にも参加している。なお、研究員それぞれの研究課題と内容は(2)研究調査活動の項に示すとおりである。

研究調査の結果は、第一研究室全員が編集担当する機関誌『美術研究』（昭和7年創刊）やその他の学会誌に発表し、また、第二研究室を中心とする『日本美術年鑑』（昭和11年創刊）を発行しており、単行の研究報告も随時刊行している。さらにそのほか情報資料部との共同で、研究成果の一部を広く一般の理解に資するために毎年一回公開学術講座を開催している。なお、黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所、現美術部は黒田清輝の作品その他関係資料を保管し、その多くを陳列する黒田記念室は毎週一回木曜日の午後公開している。

調査研究

第一研究室

日本及び東洋諸地域の古美術について、各研究員が専門とする領域と時代を中心に調査研究を進め、主要問題を捉えた共同研究を行い、常に精密な基礎資料の収集に努めている。なお、第一研究室の研究員は『美術研究』の編集業務を担当している。

第二研究室

明治以降の日本近代美術に関する調査研究と、これに関連する西洋美術及び日本近世の洋風美術の調査研究、並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査とを継続して行っている。また昭和63年度より4か年計画で特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期の資料集成」を開始し、第2年度の研究調査を行った。とくに現代美術に関する調査研究においては、その年度に収集した資料を整理し、その成果を『日本美術年鑑』として毎年公刊している。平成元年度は、昭和63年の内容をもった平成元年版を刊行し、引き続き平成2年版の編集に着手した。

また、昭和52年度以降実施してきた黒田清輝巡回展は当研究室が中心となって行っており、平成元年度は茨城県近代美術館で開催した。

(2) 各 論

1. 美術における地域性及び社会性の研究

(1) 京・近江地方所在の天台系彫刻

滋賀県2件と、これに関係ある岡山県の1件、天台宗と関連があると思われる大分県宇佐地方の2件を調査した。〈三宅、井上、(情)長岡〉

滋賀、江国寺聖観音坐像

滋賀、西教寺聖観音立像

岡山、明德寺聖観音坐像

大分、天福寺塑像・木彫像群

大分、竜岩寺阿弥陀・薬師・不動坐像

(2) 関東地方における浄土宗の美術

茨城、常福寺拾遺古徳伝絵〈(情)米倉〉

- (3) ㉠視覚情報の伝播経路とその発展の地域的差異・㉡芸術家の社会的地位・㉢

15-16世紀における絵画マーケット

㉠、㉡について「雪舟イメージ」が形成される過程の追求と、山口地方の大内文化を担う作品に関する基礎資料の収集につとめ、㉢については扇面画研究を行い、扇面値段、扇屋の存在を示す文献的基礎資料の収集を行った。

< (情) 島尾, (情) 井手 >

- (4) 日本の洋風表現

京都の画壇と関東の画壇の間にある表現上の異同を追求した。

(三輪, 佐藤, 山梨)

- (5) 中国の美術運動

上海における美術運動に関する基礎資料を現地で調査した。 < (情) 鶴田 >

2. 美術に関する基礎資料の研究

- (1) 絵巻資料

梅津次郎氏収集絵巻資料を点検。

< (情) 米倉, (調) 佐野, (共同研究員) 村重寧, 大西昌子, 千野香織 >

- (2) 明治後半期美術資料

明治後半期の美術雑誌の目次及び美術雑誌掲載の美術界彙報を収集・整理した。

< 三輪, 佐藤, 山梨 >

- (3) 関東所在水墨画資料

栃木地方所在の室町時代水墨画とその関連資料を調査した。

< (情) 島尾, (情) 井手, (共同研究員) 河合正朝, 横田忠司, 相沢正彦, 大石利雄, 山下裕二 >

3. 特別研究「日本近代美術の発達に関する明治後半期の基礎資料集成」

(平成元年度…4か年計画の2年次)

本研究は、明治20年代以降の日本近代美術の発達に関する基礎資料、特に内外の博覧会及び美術展覧会を対象に、文献資料の収集と作品の調査研究を行うものである。

第2年度は、初年度に引き続き第3～5回国内勧業博覧会、パリ万国博覧会(1889, 1900年)、シカゴ・コロンプス世界博覧会等の出品目録及び関係資料の所在確認と調査、並びに文献資料の収集と整理を行い、併せて、上記博覧会等の出品作品

調査研究

のいくつかについて調査を行った。

4. 科学研究費「日本における絵画・彫刻・工芸各分野のモチーフの交流に関する調査研究」（一般研究(A) 研究代表者 関口正之）（平成元年度…3か年計画の第2年次）

絵画・彫刻・工芸各分野の様々な側面での密接な関係が、その史的展開に大きく反映されていることは、日本における美術のあり方を端的に示す重要な特色のひとつといえる。こうした特色は、従来指摘されながらも、具体的な問題に即した総合的な解明はみられていない。本研究は、モチーフの問題を各分野間の接点に据え、絵画・彫刻・工芸各分野における共通のモチーフを取り上げて相互に比較検討を加え、その史的展開を明らかにすることを目的とする。特に、古代・中世研究班は、絵画・彫刻と染織・蒔絵・金工の工芸分野の作品にみられるモチーフ・文様の比較研究を行い、近世・近代研究班は、作家を中心に据え、各分野における主題及びモチーフの伝承関係を検討する。また、同研究班共同で広範な基礎資料の収集にあたる。

研究分担者は美術部・情報資料部の研究員全員と修復技術部中里壽克室長・東京芸術大学中野政樹教授を加えた14名である。

本年度の研究成果は次の通り

（古代中世研究班・第一班）

仏画に関しては仏涅槃図におけるモチーフの整理を通じて仏伝表現の変容を検討。彫刻に関しては十一面観音・如意輪観音の図像的側面、菩薩の着衣形式を比較するため次の作品を調査した。十一面観音：三重瀬古区像、福岡長谷寺像。如意輪観音：京都醍醐寺像、京都平等寺像、福岡如意輪寺像。着衣形式：岡山明王寺聖観音像、奈良普門院菩薩像、東大寺音声菩薩像、兵庫古法華三尊石仏。また法隆寺金堂調査に参加（井上、長岡）した。

（古代中世研究班・第二班）

高僧伝絵について岡山県立博物館の伝法絵調査に基づき説話画におけるテキストと表現の関係を継続して研究し、肖像画については佐賀万歳寺見心來復・以享得謙像を調査した。

工芸については、京都国立博物館の金工作品と、春日大社蔵の漆工品を調査した。

(近世近代研究班)

近世以降を対象とする研究分野が「モチーフ」の語を広義に用いる傾向があることに拠り、モチーフの典拠を中心に研究した。近世については宗達作品に見られる古典モチーフの検討を継続し、近代については洋画における構想画の成立と展開、風景画登場などの問題を黒田清輝の作品を中心に研究し、また、近代日本画における水墨画の変容について研究した。

2. 芸 能 部

(1) 概 要

芸能部は、日本の伝統芸能に資するために必要な基礎研究を行うことを目的とし、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室によって構成されている。芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法及びその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備、及び記録の作成のための撮影・録音・録画などの作業を行う。また、研究の成果は刊行・夏期学術講座・公開学術講座などによって公表する。

平成元年度は、特別研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」(4年計画)の第2年次にあたり、前年に引き続き部をあげて調査研究を行った。

演劇研究室

日本古典劇について芸能学的に調査・研究を行い、また、これら諸芸能の周辺にあつて、伝統芸能の成立に深い関係をもつ諸分野についても調査研究を進めている。

平成元年度は、個人研究として「寺院行事の研究」「能楽技法に関する総合的研究」「絵画資料による近世演劇研究」を行い、共同研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究」に参加した。なお、「寺院行事の研究」では、特に過去20年にわたつて調査・記録を行った録音資料に基づいて、諸宗派の論義法要形式の比較分析を行い、これと併行して、前記資料の永久保存のためのPCMダビングの作業を継続している。

音楽舞踊研究室

日本の音楽と舞踊について、芸能学的・音楽学的な調査研究を行い、これら伝統芸

調 査 研 究

能の成立に深い関係をもつ周辺分野についても、調査研究を進めている。

平成元年度は、個人研究として、「日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究」「日本舞踊における物真似の技法の研究」を行ったほか、共同研究「仏教系芸能の芸能史的
位置づけのための調査研究」に参加した、

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承される民俗芸能を対象とし、それらの保存・継承に資するため
に必要な研究を行っている。

平成元年度は、個人研究として「民俗芸能における採り物の研究」「上方落語の研究」
、共同研究として「民謡の研究」を行い、「仏教系芸能の芸能史的
位置づけのための調査研究」に参加した。

(2) 各 論

1. 仏教系芸能の芸能史的 位置づけのための調査研究（4年計画の第2年次）

わが国の伝統的な行事や芸能が、仏教との関わりの中に展開してきた様相を具体的
に解明し、文化史的・芸能史的
位置づけを行うことを目的とし、研究対象として“延年”を取り上げている。

本年度はその第2年度であるが、昨年度に引き続いて“延年”の実態把握を主眼と
しながら、下記の調査・研究を行った。

- (1) 伝存事例の中で古態を伝えていると思われるものの
実地調査：中尊寺「故実舞」・毛越寺「舞殿落成記念延年会」・日光輪王寺「延年」・成仏寺「修正鬼会」の録音、VTR録画、写真撮影等。
- (2) 修験系の伝承事例と伝えられるものの
実地調査：雷電神社「高寺八講」・新山神社「新山延年」・大物忌神社「蕨岡延年」の録音・写真撮影等
- (3) 関連資料の調査：慈恩寺「年中行事関係史料」・日光輪王寺「常行堂関係史料」の調査撮影
- (4) 研究会開催：研究発表「延年への視点」

2. 能楽の芸能学的調査研究（5年計画の第1年次）

平成元年度において全員が取り組む共同研究としては、本課題のほか
に上記の特別

研究「仏教系芸能の芸能史的位置づけのための調査研究（延年）」があり、本年度は延年の基礎調査である実態把握が前年度に引き続いて主要な調査研究活動となった。また、本課題に関しては、基礎的な調査研究のための予算（旅費等）も必要であるため、次年度の科学研究費を申請し、本課題に基づく実質的研究を1年遅らせることになった。全体としての活動は平成2年度から取り組む予定である。

ただし、能楽の技法面に関しては、下記4においてこれまで続けてきた能の囃子事についての研究成果を、近く刊行物の形で公表する。また、夏期学術講座で発表した「能楽—新しい潮流—」は、本課題に関する成果の一つである。

3. 寺院行事の研究（8年計画の第5年次）

寺院行事が内包する多種多様な要素の中から芸能的要素を抽出し、各宗派にわたる調査研究を行い、その変遷・分化をあとづけようとする。本年度は悔過法要の詞章を本尊別に分類してその展開を追い、その成果の一部を「芸能の科学 18」に公表した。また、論義法要における問答の諸形式についての比較分析を昨年度に引き続いて実施した。

（佐藤・廣瀬）

4. 能楽技法の総合的研究

能楽における演劇的・音楽的・舞踏的な各種技法を客観的・体系的に解明することを目的とするが、本年度は、特に囃子事（出入事・動事）について各流派のデータを整理・分析し、研究成果を公表する。（羽田・蒲生）

5. 絵画資料による近世演劇の研究

絵入り浄瑠璃本・絵入り狂言本の挿絵から当時の舞台の様相・観客および読者の要求を検討する。今年度は、特に金平浄瑠璃を取り上げて考察し、その成果の一部を「芸能の科学 18」に公表した。（鎌倉）

6. 日本音楽各種目の独自性と相互影響の研究（5年計画の第1年次）

本年度は、能の謡、義太夫節、新内節をとりあげた。謡については、初期の文献資料から音楽的記載を抽出し、義太夫節については、丸本の節章の校合および今日の伝承との比較を行った。新内節については、所外の研究者と共同で「蘭蝶」の音高変化、音量変化をメログラフを用いて記録した。なお、本年度の公開学術講座における講演「義太夫節の音楽」は、この課題に関する成果の一部であり、「芸能の科学 18」にも公表した。（蒲生）

調査研究

7. 民俗芸能における採り物の研究（7年計画の第4年次）

民俗芸能を総合的な視野で把握することを目的とする。そのために、各種目の構造・技法分析の一環として、各種芸能にさまざまな形で用いられている採り物——特に扇——の意義・種類・用途などに関する分析研究を行った。（中村）

8. 日本舞踊における物真似の技法の研究

歌舞伎舞踊の中から、大道芸人、物売りなどを扱った作品を取りあげ、振りの要素の一つである物真似の技法を考察している。本年度、その成果の一部を舞踊学会において発表し、「芸能の科学 18」に公表した。（丸茂）

9. 民謡歌詞の様式研究

全国的な民謡歌詞調査結果に基づき、東北地方の歌詞カードの作成を進めた。（中村）

10. 上方落語の研究

現行演目の原話について、昔話・巷談・奇談等との交流について研究を進め、その成果の一部を「芸能の科学 18」に公表した。（三村）

3. 保存科学部

(1) 概要

文化財の材質・構造・劣化に関する科学的研究ならびに文化財を取り巻く環境の研究を行なっている。研究成果は修復技術部と共同編集の機関誌「保存科学」により公表され、文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。研究組織は化学研究室、物理研究室、生物研究部の3室からなり、63年度より東京大学理学部野津憲治助教授が客員研究員（併任）として研究に加わっている。

化学研究室

化学研究室では文化財の材質及び保存に関する問題点を化学的手法を用いて調査・研究している。X線分析法、光学的方法、質量分析法などを用い、主として金属文化財に関する劣化、保存対策、材料産地などの問題について研究を進めている。

物理研究室

物理研究室では文化財の材質及び保存に関する問題点を物理的手法を用いて調査・研究している。文化財の材質、構造を調査する方法としてγ線・X線・紫外線・赤外線などを用いている。また展示、収蔵、梱包などの文化財を保存する環境の評価と劣化防止の方法について研究を行っている。

生物研究室

生物研究室では文化財の保存に関する問題点を生物学的な見地から調査・研究している。文化財の生物による劣化、すなわち微生物や昆虫による被害の実態調査、そしてこれら加害生物による劣化の機構を明らかにし、加害生物防除法の研究と開発を行っている。

平成元年度からは中長期研究計画による研究が開始され、保存科学部では別表のように3本の研究が開始された。「有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の確立」(研究期間6カ年)では、有機質材料の光や温度・湿度による劣化機構の解明とその防止の研究を目的としている。平成元年度は基礎調査を行い、研究対象として絵絹を選び劣化反応生成物の同定を行った。紫外線照射による絹の光劣化は、絹繊維の主要部であるフィブロインの非結晶領域やフィブロインを取り巻くセリシンに含まれる芳香族アミノ酸に主として起きているが、タンパク質をアミノ酸に分解するほどではないことを明らかにした。

「特殊環境におかれた文化財の保存条件の検討」(研究期間8カ年)では、「アルカリ」、大気汚染など文化財を傷める因子の多い現代の環境から文化財をいかに守るか、博物館・美術館の展示収蔵環境がいかにあるべきかを研究することを目的としている。平成元年度は全国各地の博物館資料館などの実情を調査した。

「フォクシングの保存科学的研究」(研究期間4カ年)では絵画や古文書に発生する褐色斑点(フォクシング)の要因と形成のメカニズムを微生物学的観点から究明し、修復方法を確立することを目的としている。平成元年度はフォクシングを起こした部位を分析して、紙のセルロースに由来するセロオリゴ糖とアミノ酸が存在することを明らかにした。

この他、中長期研究計画以外の主要な研究として、鉛同位体比分析、X線蛍光分析、

調査研究

X線回折分析、放射化分析などの手法を用いて、銅、青銅、黄銅製資料の材質分析を行っていて、今年度も多くの考古学的知見を得た。また青銅に発生する進行性の錆（ブロンズ病）について研究を行い、それらの成果は秋の第13回国際研究集会で発表された。

(2) 各 論

1. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

(1) 木造文化財（含出土木材）

a. X線透視撮影による調査研究

今年度は、下記の作品の撮影と調査を行った（三浦、石川）

作品名	所蔵者	依頼者
百済観音	法隆寺	東京国立博物館
木造阿弥陀如来立像	善福寺	平塚市教育委員会
金色堂巻柱	中尊寺	（財）文化財建造物協会

(2) 膠着剤（漆・膠・糊・天然樹脂）

東大寺南大門仁王像（吽形）の修理にともない、文化庁美術工芸課からの依頼により刻苧漆中の混合物を、走査電子顕微鏡により分析して、麻の繊維であることを明らかにした。（佐野）

(3) 染織文化財・染料

厚木市吾妻坂古墳出土品を走査電子顕微鏡で観察して、植物性繊維で織られた布と、わずかではあるが、人毛の可能性の高い動物性繊維が含まれていることを明らかにした。（佐野）

(4) 絵画・顔料

a. 彩色顔料の分析

三十三間堂建築彩色の復元模写に際して、文化庁建造物課からの依頼により、現存する彩色の赤外線カメラによる調査と、X線分析を行った。一箇所からは水銀が多量に検出され、朱を使ったと推定されたが、他は白土と思われる粘土成分のみが検出されたので、白土の上に有機質塗料を用いたと判断した。（三浦、平尾）

上野輪王寺所蔵の木造天海僧正坐像が火災により被害を受けたので、被害状況

の調査をするとともに、修理のため彩色顔料の分析を行った。(平尾)

建造物彩色顔料(戸隠神社本殿、毘紗門堂など)、考古遺物の彩色顔料(米泉遺跡出土土器・漆器類など)の分析を、主として非破壊式蛍光X線分析法、X線回折装置および一部イオンクロマトグラフィー分析により行った。赤色顔料ではベンガラ、朱、丹などを確認し、白色顔料では屋外の胡粉塗り壁から石膏を検出した。(門倉)

b. 赤外線、エミシオグラフィおよびX線透視撮影による調査研究

今年度は、ブリヂストン美術館所蔵の下記の作品の撮影と調査を行った。

(三浦、田中)

作者	作品名
コロー	「ヴィル・ダヴレー」
コロー	「イタリアの女」
コロー	「オンフルールのトゥータン農場」
コロー	「森の中の若い女」
マネ	「オペラ座の仮装舞踏会」
ファンデルクルス	「ライスウェイク城」

(5) 金属文化財

a. 銅製品の鉛同位体比に関する研究

福岡県前原遺跡出土の銅鏡39面とその他の試料10種、約60試料について分析し、39面の鏡はすべて華北産の材料でできていることが分かった。(馬淵、平尾)

①浜松市出土の銅鐸、銅鍬など70試料の鉛同位体比を測定し、弥生時代の試料は中国華北産の材料で、古墳時代の試料は中国華南産の材料でそれぞれできていることが分かった。弥生後期の住居跡から出土した銅製の釣り針が朝鮮産の材料でできていることが分かり、今後の問題点として残った。②福岡県春日市出土の銅戈48本など70試料について分析し、すべて華北産の材料でできていて朝鮮産の材料は使われていないことが分かった。また細型銅剣は朝鮮産、銅戈はそのほとんどが華北産の材料であることが分かった。③東京都利島、堂島神社出土と鏡16面を分析し、華南産の材料でできていることが分かった。④福島県うまや遺跡出土の和銅開珎を約20種分析し、日本産の材料を使用していることを確認した。(以上4件とも平尾、受託研究)

スミソニアン研究機構との共同研究のため標準試料の作製と測定を行い、鉛同位体

調査研究

比に関する共通のデータベース作成のための打合せを行った。この他、文化庁、東京国立博物館の所蔵品など約60種の試料について依頼分析を受け、鉛同位体比を測定して、材料の産地に関する情報を得た。(平尾)

b. X線分析による銅製品の材質分析

法隆寺四十八体仏80試料について蛍光X線分析を行った。銅製、青銅製、ヒ素銅製の像があり、材質は様々ではないことが分かった。今回で一応全試料の測定が終了した。この他、東京国立博物館および各県教育委員会からの依頼により、約50試料の材質分析を蛍光X線分析法で行った。(平尾)

c. 金及び鍍金試料に関する研究

朝鮮半島産金製品及び鍍金試料の材質を非破壊的に蛍光X線分析法で調べ、朝鮮産の金試料(耳飾り)は金の純度がほぼ95%以上であることが分かった。(平尾)

現代の技法によって制作された箔鍍金、消し鍍金、電解メッキ、漆貼り箔の試料の表面状態と金層の厚さを観察した。箔鍍金、消し鍍金では、水銀の蒸発する際にできたと考えられる粒状の構造が観察され、鍍金面の金の密度が半分程度に落ちていた。

(佐野, 平尾)

d. トルコ出土金属製品の分析

トルコ共和国、カマン-カレホック遺跡出土の銅、鉄製品約40試料の化学組成をICP発光分光分析法で明らかにし、時代と化学組成の変遷について考察した。顕著な特徴はなかったが、ヒッタイト時代は純銅製品のみ、フリギア時代は青銅と純銅が混じっていることが分かった。ヒッタイトの鉄試料については研究中である。

(平尾, 一部受託研究)

e. 北魏銅鑲(盛楽城出土)断面の面分析

走査電子顕微鏡により、面分析を行った結果、鉛、スズ、硫黄、ひ素の濃縮の状態が明かとなった。(佐野)

f. X線透視撮影による調査研究

今年度は、下記の作品の撮影と調査を行った。(三浦, 石川)

作品名	所蔵者	依頼者
金銅仏	東京国立博物館	同左
刀剣(銘国重)	刀剣協会	同左

刀剣（銘橋正弘）

刀剣協会

同左

2. 材質の劣化に関する研究

(1) 木造文化財（含出土木材）

出土木材を保存している最中に、軟腐朽菌に起因する劣化現象があるので、本菌の分離同定を行い、その保存方法を検討した。（新井，科学研究費）

(2) 紙質文化財

a. フォクシングの保存科学的研究

フォクシングが発生している和紙と中国紙の試料を分析して、フォクシング部位にはグルコースを構成糖とするセロオリゴ糖と、 γ -アミノ酸を特異的に含有する13～16種類のアミノ酸が存在することを明らかにした。またどんな環境条件下でフォクシングが形成されるかについて検討した。（新井，中長期研究計画）

b. 「風邪引き紙」の研究

日本画などの修理の際にドウサが効かないため、しばしば問題になる「風邪引き紙」の原因について、微生物学の立場から研究を行った。（新井，受託研究）

(3) 染織文化財・染料

a. 絵絹の劣化機構の解明

練りを加えていない絵絹を試料とし、殺菌灯照射（照射波長254nm）、ブラックライト照射（照射波長300-400nm）の紫外光源による劣化促進処理を行った。殺菌灯を短時間照射すると容易に絵絹は黄変し、柔軟性は失われ軽く力を加えると粉状になった。走査電子顕微鏡像の観察では、繊維を直角に横切る方向に深い亀裂が認められ一部では繊維の切断も起こった。破断（引張り、破裂）試験の結果、殺菌灯による劣化処理では、短時間の処理で測定不能なほど強度が低下した。ブラックライト照射試料では、強度は照射時間に依存した。（佐野，三浦，川野邊，中長期研究計画）

b. 絵絹の劣化度の定量的評価

紫外光照射により、芳香族アミノ酸が減少することから、この芳香族アミノ酸の減少量を指標として、劣化を定量的に評価する方法の開発を試みた。紫外光照射、電子線照射、オゾン曝露による強制劣化処理前と後の試料を、様々な手法を用いて解析した。結果は、赤外分光分析における情報は振動波数の移動としてあらわれ、定量化できず不適であった。また炭素13の核磁気共鳴分析では必要とする試料量が多く、

調査研究

現状では微量分析は不可能であった。紫外可視吸収分光分析，電子スピン共鳴法，化学発光法の3つの方法は，劣化の定量的評価に利用できる可能性が大きい。

(佐野，川野邊，中長期研究計画)

(4) 絵画・顔料

a. 油彩画に発生する結晶性物質に関する研究

本年度は17点の作品について，非破壊式蛍光X線分析法，X線回折装置および一部イオンクロマトグラフィー分析装置により調査し，従来の測定結果と合せて検討した結果，結晶の発生は亜鉛を含む顔料（ベース，絵具の増量材），油抜き技法，1950年前後の作品などに多く見られた。また油彩画劣化研究の基礎資料として市販油絵具136種について非破壊式蛍光X線分析法，X線回折装置で測定しそれぞれの標準チャートの作成を行った。現代使用されている油絵具の約30%が炭酸カルシウムをベースとして染色したものであった。（門倉）

b. 障壁画に発生するカビの防除

瑞巖寺障壁画の微生物学的調査を行った。（新井，科学研究費）

(5) 金属文化財

a. 青銅鑄の研究

MOA美術館からの依頼により，同館所蔵のムア作「王と王妃」像のX線透視撮影と析出物の分析を行い，ピンホールからでてくる白い析出物は像内に残された中子が雨水で溶出するもので，黄色い析出物はそれに鉄製のボルトの錆が加わったものでわかることを明らかにした。（三浦，平尾）

銅製品に発生する錆を，放射化分析法，X線回折法により分析して，錆の化学組成を同定し，錆の進行についての情報を得た。一見安定して見える錆にもブロンズ病と呼ばれるアタカマイトが存在することもあり，錆の判定に新たな問題点を提起した。

(青木，平尾，科学研究費)

ブロンズ彫刻に発生した白色結晶や腐食生成物，考古遺物の鉄器，銅器の腐食生成物などを，非破壊式蛍光X線分析，X線回折，イオンクロマトグラフィーにより分析して，金属文化財の劣化要因について研究を行なった。（門倉）

(6) 石造文化財

福島県小高町薬師堂石仏覆屋の温湿度を昭和60年から継続測定している。石仏表面

の観察によれば大屋根仮設後、岩体は乾燥する方向にある。しかし覆屋の密閉が良くなったために室内は夏冬を通じて高い湿度を維持し、特に冬期天井に著しい結露がみられた。調査の結果、この原因はすきま風により、屋根裏の気温が低下するためとわかり、来年度石仏本体の保存修復処置と併せて、必要な対策が取られることとなった。

(三浦、西浦)

(7) 遺跡・住居跡

a. 虎塚古墳の保存

虎塚古墳壁画の画面に発生したものが、ナミハグモの一種の営巣であることを究明し、防除対策を講じた。(新井)

b. 三殿台遺跡住居跡の保存

保護棟の内と外とに温湿度計を設置して、年間継続測定を行った。又遺構面からの水分の蒸発量も測定し、主に遺構面から水分が日照によって蒸発することによって、保護棟内の湿度が高くなっていることを明らかにした。(三浦、青木、川野邊)

遺構表面を覆っている蘚苔類、地衣類、藻類、菌類と遺構表面に直径1～2cmの穴をうがって営巣する昆虫を採集して同定し、防除対策を検討した。

(新井、受託研究)

3. 環境に関する調査研究

(1) 温度・湿度・水分

改良工事後の中尊寺金色堂保存施設内の温湿度を測定したところ、年間(1989年)平均温湿度は14.6℃、63%で日変化も少なく、工事前に比べてたいへん安定して良い環境にあることがわかり、黴や錆の新たな発生も見られなかった。(三浦、石川)

(2) 光・照明

文化財の展示に用いられている光源の分光特性や材料の紫外線透過特性について調査した。透明度の高いガラスは紫外線も良く透過させるので、紫外線防護措置を施した光源との組合せでないと使用できないことが分かった。(三浦、佐野)

(3) 大気汚染

自動車交通量の激しい都心の美術館、海岸に隣接した美術館と日本家屋、当研究所記念室の合計4地点、13ヵ所で二酸化窒素、二酸化イオウ、塩化物イオン、硫酸イオン、硝酸イオン濃度の年間継続測定と銀、銅板の暴露試験を行った。結果は測定因子

調査研究

により多少異なるが、都心部の屋外で汚染濃度が最も高く、空調設備のない施設では外気の影響を受けているものの、一般に二酸化イオウ、塩素、硫酸の影響は屋内で軽減されていることがわかった。またこれら汚染因子の金属（銅、銀）への作用について検討した結果、二酸化イオウ、硫酸など硫黄を含む因子と二酸化窒素とは変色経過が異なって観測された。（門倉、一部科学研究費）

(4) 生物

微風速風洞を用いて風速を変え、様々な湿度空気の風速がカビの胞子の発芽阻止に与える効果について、基礎的な実験を行なった。また実際に障壁画を展示している環境の風速分布を測定し、カビが発生する風速の限界を推定した。

（新井、科学研究費）

4. 調査・指導

(1) 展示・収蔵環境

下記の博物館、美術館、資料館などの館内環境について、温湿度、照明、汚染因子などの調査を行い、適切な条件で作品の収蔵・展示ができるよう指導した。

（石川、三浦、馬淵）

所在地	館名
秋田県	秋田市千秋美術館
山形県	最上義輝記念館
	山形市芭蕉記念館
群馬県	高崎市観音塚資料館
埼玉県	川越市立博物館
千葉県	菱川師宣記念館
神奈川県	浄光明寺収蔵庫
	川崎市民ミュージアム
	金沢文庫博物館
	横浜市三溪園資料館
長野県	飯田市美術博物館
新潟県	新潟市立美術館
三重県	斎宮歴史博物館

	皇学館大学神道博物館
滋賀県	大津市歴史博物館
	栗東歴史博物館
京都府	京都府文化博物館
大阪府	国立民族学博物館
兵庫県	龍野市立博物館
広島県	広島県立歴史博物館
	吉田町歴史博物館
香川県	多度津町資料館
福岡県	福岡市博物館
鹿児島県	尚古集成館別館
沖縄県	浦添市美術館

(2) 生物被害の防除

下記の文化財に発生した生物被害の調査を行い，原因を究明するとともに防除対策を指導した。（新井，山野）

所在地	調査対象	生物劣化の原因
新潟県守門村	旧目黒邸中庫，新庫 （重要文化財）	ナミダタケ，オイジウム菌 ヤマトシロアリ
東京都	国立国会図書館本館	フルホンシバンムシ ジンサンシバンムシ
	東洋文庫分館	フルホンシバンムシ ジンサンシバンムシ
	（以上2件は一部の書籍を当研究所で燻蒸処理）	
兵庫県	姫路城	クラドスポリウム菌
広島県千代田町	木造彫刻	カワキアオコウジカビ
	厳島神社千疊閣	カミキリの幼虫
山口県	東光寺	シバンムシ
大分県朝地町	磨崖仏	オオロウソクゴケ レブラゴケ等

調査研究

臼杵市	臼杵磨崖仏	チブサゴケの一種
長崎県	大浦天主堂	クラドスポリウム菌
	崇福寺	シロアリ

4. 修復技術部

(1) 概 論

文化財の修復に関する調査研究、科学的修復方法の開発研究とその公表、応用を主務とする。研究の対象は美術工芸品、建造物、考古資料、民俗資料など、有形文化財のすべてが含まれるほか、遺構等の保存方法の開発も行っている。

組織としては、文化財を構成する主材料に合わせて3研究室からなっている。

第一修復技術研究室は、工芸品、建造物など木材及び漆を主とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表を行っている。

第二修復技術研究室は、書籍、考古資料、絵画などを主として繊維または、皮革を主材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表を行っている。

第三修復技術研究室は、建造物・考古資料・美術工芸品などの金属、石材、その他無機材質の文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその結果の公表を行っている。

とくに、科学的な修復方法の開発は、合成樹脂を利用した修理や、プラズマ法による保存処置など保存修理の実際に大きな成果をあげている。

一方、文化財の修復に関する研究は、文化財そのものの材質、製作技法に関する科学的研究を通して、相互関係を実証することが重要な課題である。平成元年度からは修復技術部の中長期研究テーマとして、『文化財の伝統的保存修復材料に関する研究』を4か年計画で着手した。

また、とくに屋外にある不動産文化財の保存が今日的な問題となりつつある現況を踏まえて、『屋外にある文化財の劣化過程の調査と修復方法の研究』をテーマとする共同研究を平成元年度から5か年計画で発足させた。

(2) 各 論

1. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

(1) 膠着剤（漆・膠・糊・天然樹脂）

a. 漆

古代の膠着剤について調査した。8世紀の脱乾漆、木芯乾漆に用いられる麦漆、漆刻苧等は、本来漆を膠着剤として使用するが、麦、米糊等が用いられる場合が考えられ、その現状を8世紀から12世紀に広げて調査した。これらの内、中尊寺金色堂巻柱の漆地粉を分析し、米糊の存在を確かめた。（中里）

b. 密陀絵の技術的研究

桐油と荏油を主材とし、これを加熱、顔料を加えることによって密陀絵具ができるが、江戸時代以来の伝統は明確でないところがある。そこで、油の割合、加熱時間、密陀僧の添加、膠の添加等について内容をかえ、実験を行った。

（中里）

(2) 紙質文化財

a. 東アジアの手漉紙原材料の調査

敦煌出土とされる写経料紙サンプル5点について、物性および繊維組成の調査を行った。現在までの所、時代の古い紙と現代の手漉紙との間には明らかな密度の差が認められている。（増田）

b. 古代の紙に関する研究

昨年に引続き、スウェーデン国立民俗博物館で新たに発見された、ヘディン収集楼蘭文書5点について調査と修復処置を行った。その結果、全てが大麻繊維で出来ていること、漉簀から湿紙を剥して壁などに刷毛で張り付け乾燥したこと、また測定値から換算した嵩比重は、現代の手漉和紙に似ていて、打ち紙加工はしていないと推測される点は、昨年に調査した文書料紙と同じであった。しかし、その内の1点は、未解離の紙片の混入が観察される紙であり、最古の漉返し紙の例となる。さらに、泡が崩れたように見える箇所解釈について、漉あげた紙を脱水プレスなしに直接乾燥面に張り付けたとき、刷毛の動きによって出来た形跡との結論に達した。なお、調査、測定については昨年と同様、高知県紙業試験場

調 査 研 究

の援助を得て修復技術部内で行った。(増田)

c. 古写経料紙の物性の測定調査

平安時代から江戸時代にいたる写経を中心とする料紙断片66点について、厚さ・密度・繊維等の物性を測定中である。(増田)

(3) 金属文化財

a. 蒐集済み銅、鉄製品の材質と結晶構造の調査

年代の明確な金属を調査して、それぞれの化学組成や腐食生成物などの特徴を把握し、保存に役立てようとするものである。

1) 資料整理

当研究所に蒐集されていた鉄建築部材から採取した鉄釘他44件などの整理を行った。

2) 上記の資料の中から化学組成を知るために武蔵工業大学に放射化分析を依頼した。

- | | |
|---------------------|--------|
| ① 国宝 福山市明王院鉄釘 | 1690年 |
| ② 国宝 京都市教王護国寺五重塔鉄釘 | 1644年 |
| ③ 国宝 京都市西本願寺書院鉄釘 | 1624年頃 |
| ④ 重文 群馬県世良田東照宮鉄釘籠 | 1618年 |
| ⑤ 国宝 滋賀県彦根城天守一層窓飾金具 | 1607年 |
| ⑥ 重文 広島県東観音寺多宝塔かすがい | 1528年 |
| ⑦ 国宝 広島県瀬戸田向上寺三重塔鉄釘 | 1433年 |
| ⑧ 国宝 奈良市興福寺北円堂鉄釘 | 1211年 |
| ⑨ 国宝 奈良県当麻寺化粧裏板鉄釘 | 1690年 |
| ⑩ 国宝 奈良県当麻寺内外陣方立鉄釘 | 1487年 |
| ⑪ 国宝 奈良県当麻寺東野地止鉄釘 | 1342年頃 |
| ⑫ 国宝 奈良県当麻寺内陣化粧裏板鉄釘 | 1160年 |

放射化分析を行なう原子炉に故障があり現在分析が不可能であるため結果が得られていない。

3) 以下の鉄釘の金属結晶構造を東京工業大学に依頼して分析調査中である。

- | | |
|---------------------|-------|
| ① 国宝 広島県瀬戸田向上寺三重塔鉄釘 | 1433年 |
|---------------------|-------|

- ② 国宝 奈良市興福寺北円堂鉄釘 1211年
 ③ 国宝 奈良県当麻寺内陣化粧裏板鉄釘 1160年 (青木)

2. 材質の劣化に関する研究

(1) 木造文化財(含出土木材)

a. 丹塗塗装の耐久性に関する研究

社寺等の外部化粧としての丹塗塗装について、合成樹脂等種々の材料によって耐久性を改良する方法とその問題点を実験的に研究、考察し、あわせて島根県日御碕神社をフィールドとした現地曝露試験を行っている。丹を含まない合成樹脂塗装が抜群の耐久性を有していること、丹と合成樹脂を混合すると極端な変色など種々のトラブルが生じること等が判明しつつある。(西浦, 川野邊)

b. 史跡名寺の彩色の調査

60・61年に復元された平橋および太鼓橋の丹塗りが急激な白色劣化を示したため、その原因と対策に関して、調査と実験を行なった。原因は、屋外建造物に適さない塗料の選択・施工によるものであった。対策としては、環境に適した塗料の新たな開発と施工使用を提案し、本仕様に基づき再塗装が行われた(川野邊)

c. 木造文化財の風食痕の検出

シリンドリカルレンズを用いた平行光を発生させる装置を開発し試用している。現在は、白色光を用いているが、より平行度を向上するために、赤色レーザを用いた装置の開発を計画している。(川野邊)

d. 出土水浸木材の保存処理後の安定性

試験片を用いた実験的研究を進めており、本年度も昨年度に引き続き環境湿度変化に伴う寸法変化について、歪ゲージを用いた計測システムにより測定、解析し、その挙動を調べた。PEG処理したものを長期間低湿環境に置くと長期に渡って徐々に収縮し、ついには割れが発生する現象が観察され、この原因がPEGの収縮にあることが示唆された。(西浦, 今津)

(2) 膠着剤(漆・膠・糊・天然樹脂)

a. 糊

接着剤による発黴性の違い

近年、接着剤として紙製文化財修復に用いられているメチルセルロース(MC)

調査研究

の坑カビ性を小麦澱粉・布海苔と比較するための実験を行い、低濃度では接着剤の種類以上に塗布される紙の性質が影響をしている傾向がみられた。なお、この実験はユネスコ研修生によって行われた。(増田)

(3) 染織文化財・染料

絵絹の劣化機構・原因の究明と日本画修復材料としての劣化絹の作成と評価短・長二種類の波長の紫外線とオゾンを用いて絵絹を人工劣化させ、紫外・可視・赤外領域での分光科学測定、NMR(核磁気共鳴分析)、走査型電子顕微鏡などで、物性を測定した。(保存科学部と共同)さらに、工房と協力して修復材料としての使用評価を行った。この結果、劣化度に比して柔軟性が大きいなどの従来の電子線劣化絹とは異なる長所も見いだせた。(川野邊)

(4) 金属文化財

a. 屋外におかれた金属の腐食機構の解明と修復について

1) 日御碕神社飾金具

日御碕神社飾金具は、海からの塩分を含んだ雨、強い風による海塩粒子を含んだ飛沫のため腐食が激しい。その保存対策を立てるため以下のような実験を行っている。

(イ) サンプル

9cm×12cm×厚さ0.1cmの大きさの電気銅銅板を使用して

①電気メッキ(メッキ厚さ約0.03ミクロン)

②水銀箔鍍金(箔を3枚、5枚使用したもの2種類)

③漆箔(下地に焼きつけ漆をしたものとししないもの2種類)

上記のサンプルに以下のような樹脂を塗布した。

①メラミン樹脂焼付け

②エポキシ樹脂焼付け

③フッ素樹脂焼付け

④シリコン系樹脂塗布

⑤アクリルウレタン系樹脂塗布

(ロ) 耐候性試験

①日御碕神社での曝露試験(平成元年12月初旬から開始)

②ウェザロメータによる耐候性試験（平成２年１月から開始）

③塩水噴霧試験（平成２年１月から開始）

(ハ) 材質分析

腐食機構を解明するために宝珠、唄など３種類ほどの金具の蛍光Ｘ線分析を行った。

化学組成としては以下のようなものである。

①少量の鉛を含んだ銅

②少量の亜鉛を含んだ銅

(ニ) 腐食生成物の同定のためにＸ線回折分析を予定である。（青木）

2) 小山寺相輪

この相輪は、鉄製の部分と銅で作られた部分とからなっている。擦管や宝珠などは銅で作られており鬆の部分も鋳鉄で鑄かっている。

本来ならばこの接触部分は腐食していなければならないが良い状態であった。鉄で出来ている擦管と九輪は腐食破損していた。その接着強化と塗装による腐食防止を検討した。腐食対策のために下地塗装にエポキシ亜鉛塗料を使用し、表面塗装はフッ素樹脂を塗布した。

(イ) 耐候性試験

①防錆能力を判断するために2000時間の塩水噴霧試験を行った。その結果付着力・防錆能力とも問題がなかった。

②ウェザロメータによる耐候性試験は、進行中で1000時間を経過したが、現在のところ大きな変化が見られない。

(ロ) 修復処理

上記の結果から九輪の修復施工を行った。

①サンドブラストをかけ錆を除去した。

②エポキシ亜鉛塗料を３回塗布

③エポキシ樹脂を２回塗布

④フッ素樹脂を２回塗布

調 査 研 究

擦管は、

- ①割れや欠失部分を新しく鋳物で作り、溶接した。
- ②サンドブラストをかけ錆を除去した。
- ③エポキシ亜鉛塗料を3回塗布
- ④内部は、エポキシ樹脂とガラス繊維（FRP）で強化した。
- ⑤フッ素樹脂を2回塗布

(5) 石造文化財

a. 凍結劣化

石造建造物および木造建造物の石造部材の凍結劣化とその防止法に関する調査研究を継続して行っているが、本年度は気象環境と劣化現象及び防止効果についての総合的な解析を行い、総括報告書を作成中である。（西浦）

3. 文化財修復技術の開発

(1) 木造文化財

a. カーボン繊維による木造構造部材の補強

木材構造部材の補強修復材料として、カーボン繊維で造った網（CFCC）を用いる方法について実験的に検討し、CFCCにプレストレス（テンション）を与えることによってかなりの補強効果があることが判った。（西浦）

b. 有機遺物の保存修復に関する研究

出土水浸木材の保存修復処置については、マンニトール・PEG法を開発してきたが、通常の木材についてはその技術が確立され従来に比べ低コストで保存処理することが出来るようになった。漆器とくに中世漆器は、有機溶剤などに触れると漆塗膜がはがれたり、塗膜が比較的緻密なため強化薬剤の浸透が困難であったりするが、マンニトール・PEG法では漆塗膜に比較的影響を与えない水系で処理できるためにこの種の問題が解決される事が分かった。また剥離した漆塗膜の接着については、溶剤に溶かしたホットメルト樹脂を木材と漆塗膜の間に注入してから電気コテで押えることで堅くなった漆膜を柔軟にして接着する方法を確立した。（青木）

(2) 紙質文化財

a. 出土文書の修復処置に関する研究

昨年に引続き、スウェーデン国立民俗博物館の要請によって、ヘディン収集楼蘭文

書の修復処置を行った。修復処置は、文書の形をくり抜いた、極薄い楮紙（天具帖紙）の繊維先端で文書と接着させて文書を嵌め込んだ状態で保持し、楮紙を台紙に半固定する方法をとった。なお、修復処置は専門家の援助を得て修復技術部内で行った。（増田）

b. 小型漉嵌め機の試作

漉嵌め機による文書修復の機能が認識されるにつれて、漉嵌め機に対する需要も多くなった。また、基本機能であるサクシオンテーブルの絵画・文書修復における効果も認められつつあるので、サクシオンテーブルの単純化を図って、小型・机上型を設計試作した。現在元興寺文化財研究所で、試行中である。（増田）

c. スポット・サクシオンテーブルの試作

局所的なクリーニングや各種処置後の洗浄を行うために、スポット・サクシオンテーブルを試作、工房で試用し成果をあげた。その一つは、直径65mmの三角プラスチック型で、他は同直径の太鼓型である。両型共に、トラップボックスを介して通常の掃除機に接続して使用できる。（増田）

d. 風邪引き紙の研究

東京・京都の日本画材料店で新しい日本画用紙30種、文化財修復の専門工房からフォクシングが出た古い紙21点を収集し、新紙については繊維組成、含水率、吸水率などを測定中である。新紙の内、薄墨を斑点状に吸収する紙については、風邪引き紙として、微生物の培養を試みている。（増田、新井）

(3) 金属文化財

a. 瀧峯七曲り2号銅鐸の保存修復研究

この研究の目的は、静岡県伊佐郡細江町瀧峯七曲り遺跡から発見された銅鐸の保存修復処置と材質、原料産地の調査などにある。

＜保存修復＞ 超音波メスによる泥や錆のクリーニング、ソクスレー方式による脱塩処理、ベンゾトリアゾールによる錆の安定化処理およびインクラックの減圧含浸により強化処理を行なった。折損部分はエポキシ樹脂を使用して復元を実施した。

＜分析調査＞ 蛍光X線法で材質調査を行なった結果、この銅鐸は鉛を少量含んだ青銅であることが判明した。アンチモン、銀、ヒ素が痕跡程度測定されている。鉛同位体分析によって中国産の鉛が使用されていたことがわかった。（青木、平尾）

調査研究

b. 隈・西小田遺跡出土鉄戈・銅戈の保存修復研究

この研究の目的は、福岡県筑紫野市隈・西小田遺跡から発見された鉄戈・銅戈の保存修復処置と材質、原料産地の調査などにある。

＜保存修復＞ 鉄戈・銅戈にエアブラッシャーや超音波メスによる泥や錆のクリーニング、ソクスレー方式による脱塩処理を行なった。銅戈についてはベンゾトリアゾールによる錆の安定化処理およびインクララックの減圧含浸により強化処理を行なった。鉄戈については、新しく開発したチタネートシランによる撥水処理後、アクリル樹脂を減圧含浸強化した。折損部分はエポキシ樹脂を使用して復元を実施した。

＜分析調査＞ 蛍光X線法で材質調査を行なった結果、この銅戈は鉛を少量含んだ青銅であることが判明した。アンチモン、銀、ヒ素が痕跡程度測定されている。鉛同位体分析によって中国産の鉛が使用されていたことがわかった。（青木、平尾）

c. 金属文化財の保存修復に関する研究

鉄器を減圧槽中で燻蒸して、腐食の原因物質である塩素を酸化エチレンガスと反応させて除去する方法について東松山市の古墳から出土した鉄鏃を資料として実験を行った。まず燻蒸前の鉄鏃の塩素量を放射化分析法で定量し、酸化エチレンガスで燻蒸した。燻蒸後再度放射化分析法で塩素量を定量して処理前後の塩素量の比較し、脱塩効果を評価したが、結果的に両者の間には差がみとめられなかった。

ソクスレーシステムを用いて脱塩処理の研究を行ってきたが、この方法を基本にして脱塩処理装置を試作して実際規模の鉄器処理を実験した。抽出された塩素の量はイオンクロマトグラフィーで定量を行った。その結果基礎実験と同じ結果が得られ、この方法による脱塩処理法を確立することが出来た。

銅製品の進行性の腐食であるブロンズ病の安定化処理については、東京国立博物館東洋館に展示されているイシス（エジプト出土）に発生したブロンズ病の安定化を酸化銀を用いた方法について実験を行った。この種の安定化処理は大型遺物や有機物と一体になった遺物については有用な修復技術なので早急にその方法を確立する必要がある。（青木）

d. プラズマ法による出土金属遺物の保存修復研究

研究の目的は、プラズマによる出土金属遺物の保存修復法の開発と処理システムの確立にある。プラズマ化した水素などの元素を出土金属遺物の錆の原因である塩素や

不安定な錆と衝突させ、その化学反応によって錆を安定化させ、出土金属製品の保存に役立てようとするものである。実験によって遺物をソクスレーを用いて蒸留水で洗浄するよりもプラズマ処理を終わってから蒸留水で洗浄するほうが、30%程度洗浄効率が良いことがわかった。この結果からプラズマ→ソクスレーによる脱塩処理システムを完成させた。(青木)

(4) 石質文化財

a. 石質遺跡の新しい保存方法

磨崖仏など石質遺跡の新しい保存方法として、岩体中に撥水性シリコン樹脂を注入含浸し内部(背部)に撥水層を形成させて、地中水の侵入を防止する方法についての現場実験を福島県小高町の岩崖その他で行っており、施工上の問題点を整理、検討中である。(西浦)

4. 調査・指導

(1) 木造文化財

a. 重文崇福寺三門および第一峰門の彩色の調査

重文崇福寺三門および国宝第一峰門の修理工事にあたり、彩色の劣化状態の調査と、彩色修理の方針を検討するための調査を行った。(川野邊)

b. 海岸における木材の風化

島根県、重文・日御碕神社木部の異常な劣化現象(表面層がふかふかになる)について調査を行った結果、海からの塩を含んだ水分の影響と考えられたが、人工海水による再現実験では今のところ有意な結果は得られていない。(西浦)

(2) 石質文化財

a. 奈良県、重文・十輪院石仏龕

石仏の表面に線刻された仏画の剝離防止について現地調査を行った。剝落の箇所からみて裏込めに使用されたセメントモルタルの析出物と地中から毛管現象で上昇吸収した水分が影響を与えていると考えられ、水分の上昇を止める必要があると判断した。(西浦、川野邊)

c. 群馬県館林市、県文・青石地藏板碑

板碑は表面層の浮き上がり剝離および粉状化があり、現地での予備強化と予備接着方法、作業場に移してからの本接着、全体強化、修復方法について調査、指導

調査研究

した。(西浦)

c. 鎌倉市, 史跡・源頼朝墓

墓は凝灰岩製の層塔で多形塔身と5層の蓋石からなるが, 上3個の蓋石が何者かによって破壊された。この層塔の修復方法について調査した結果, 破壊が甚だしく修復は極めて困難と判断した。(西浦)

d. 川崎市, 市文・六字名号塔

塔の全体含浸強化, 欠損部の充填整形, 覆屋の設置についての調査, 指導を行った。(西浦)

e. 京都市, 重文・京都国立博物館本館, 奈良市, 重文・奈良国立博物館本館

石造部材の劣化状態と, 既修理箇所の経年変化について調査した。京博本館の凝石修復箇所は劣化が著しく, いずれ全面的に取り替えざるを得ないが, 当面, 強化撥水処理を行って劣化速度を遅める必要があると判断した。(西浦, 川野邊)

f. 大分県, 重文・臼杵磨崖仏堂ヶ迫石仏

石仏の古い修理に用いられている材料について調査した結果, フライアッシュセメントかそれに類似した物であり, 従って, 石に付着したこの材料を化学的に除去することは不可能と判断した。(西浦, 平尾)

(3) 遺跡など

a. 土層法面強化保存処置

遺構の保存に関連して土層面の強化保存処置の現場実験を多摩ニュータウン内の法面で行っている。土中にシリコン樹脂を含浸して土層を固定・安定化させるというものであり, 現在処置後の経時変化を定期的に観察しているが, 剥ぎ取り現地展示法も含めて検討中である。(西浦)

b. 遺構の保存処置

土の遺跡は, 土に含まれる水がある一定以上蒸発すると収縮を起こし亀裂が発生して崩壊する。したがって土に含まれる水をコントロールすることによって, 遺跡の崩壊を防止することが可能であると考えられる。シリコン樹脂及びポリエニキサン系を土に含浸することによって水をコントロールする実験を坂戸遺跡でおこなった。その結果亀裂を防止することが可能になった。(青木)

5. 情報資料部

(1) 概要

情報資料部は、従来美術部資料室の行ってきた美術に関する研究資料の作成、収集、整理、保管、閲覧等の業務を充実発展させ、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかることを目的とする。

当部所管の諸資料は美術部創設以来内外の研究者の利用に供され、文化財に関する研究資料センターの役割を果たしている。この機能をより充実させ、学術情報の増加と多様化に対応した所蔵研究資料の効果的利用を図るため、データの共有化を中心とする美術情報処理システムの研究、画像処理技術の応用、文献データベースの開発などを行っている。当部研究員は、上記業務を行うとともに日本・東洋美術史各分野で研究活動を行っている。調査研究活動の成果は「美術研究」ほか学会誌、美術部と共催の公開学術講座等で発表されている。

当部は、文献資料研究室と写真資料研究室の二室をもって構成される。

文献資料研究室

美術史関係を中心とした図書・雑誌、調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行っている。また、日本・東洋古美術関係の文献目録の作成とともに文献データベースの開発を行っている。各年分の文献目録は日本美術年鑑に掲載し、一定期間ごとに総合・増補し「日本・東洋古美術文献目録」として刊行している。現在、昭和41年～60年分について編纂作業をすすめている。

写真資料研究室

研究用写真資料の作製、収集、整理、保管、閲覧を行うとともに、各研究者の調査研究活動に協力して研究資料を撮影し、資料の充実につとめている。また、これに平行して、美術研究所当時に撮影したガラス原版の転写を昨年度に引続き実施した。本年度より美術史研究への画像処理技術の応用及び画像情報のデータベースに関する研究にかかった。

調査研究

(2) 各 論

1. 美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—

(1) データ生産・蓄積・利用の実態調査

本研究計画に関連して、科学研究費総合研究(A)「美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用」(研究代表者 米倉迪夫)を、関連諸機関の研究者を分担者として組織し(研究内容は下記参照)、また「博物館・美術館資料に関する情報交換のためのプロトコルの研究」(科学研究費総合研究 研究代表者 林屋晴三)、「全国文化財情報システム調査研究会」(文化庁)などに参加し、美術史研究機関におけるデータ生産・蓄積・利用についての構想の把握につとめた。

(2) データフィールドの検討

文献資料、写真資料、テキストを主要データフィールドとし、それぞれの特性についての検討を行なった。

(3) パイロットモデルへの基礎作業

上記の検討に基づき文献資料、写真資料についてパイロットモデル作成のための基礎作業を進めた。特に文献資料については所蔵図書を中心としてパイロットモデルの試験的運用に入っている。またテキストデータについては科学研究費により中国の画史・画論テキストの入力を行なった。

(4) 「美術史研究における基礎資料の共有化とデータベースの活用」(総合研究A)
研究代表者 米倉迪夫

研究分担者 鈴木廣之、島尾 新、井手誠之輔、長岡龍作、須藤弘敏(弘前大学)、高見沢明雄(東京国立博物館)、伊奥田光宏(千葉工業大学)、有川治男(国立西洋美術館)、木村三郎(日本大学)、丸山伸彦(国立歴史民俗博物館)、鯨井秀伸(MOA美術館)、早川閑多(国際日本文化研究センター)、奥平俊六(大阪府立大学)、林 進(大和文華館)、藤田伸也(大和文華館)、中部義隆(大和文華館)

【研究の目的】 近年、人文科学の分野においても様々な学術的データベースの構築例が飛躍的に増大し、一方、パーソナル・コンピュータの普及にともない研究者個人によるデータ生産も日常化しつつある。しかしながら、これらデータベースの利用環境が十分に整備されているとはいえず、また、様々な目的・種類のデータ生産に

有効利用できる基礎資料のデータベース化も進展していない。こうした状況のなかで、データ生産・利用に関する具体的なシステムを総合的に検討することは極めて重要な意義をもつ。

当研究グループは、これまでに美術史研究を支援するデータ領域の諸特性を生かしたモデル開発に取り組んできた。本研究は、こうした実績をふまえ、美術史の基礎資料のデータベース化と、広範な研究者による相互利用システムの確立を通じ、資料の共有化と研究支援環境の整備を具体化することを目的とする。

【平成元年度までの研究経過】

a. 研究分担者会議

今後3年間にわたる研究方針・平成元年度の研究実施計画を確認するとともに、計画細目の検討を行なった。分担者会議での検討をふまえ本年度は下記事項についてデータの入力とそれらの処理等に関する研究を行った。

b. データファイルの作成

- 1) ユーティリティ：各種F E P上での使用を目的とした美術史研究者専用辞書データファイル。

平安～桃山時代日記・記録データベース。

全文テキストデータ：『歴代名画記』など中国の画史・画論の全文テキストデータ。

c. データ処理等に関する研究

- 1) 美術史辞書作成のための用語の選択と語の属性に関する研究
- 2) 全文テキストデータの処理に関する基礎的研究
- 3) データライブラリについての検討

d. 研究会の開催等

公開の研究会を開催し、入力データの処理例について各研究班から研究経過報告を行なった。また関連機関・研究者に対して作成データの試供を開始した。

2. 日本・東洋美術史文献データベースの開発

- (1) 文献情報におけるデータベースフィールドの検討とデータ構造の検討

文献データベースの構造、他のフィールドのデータベースとのリンクなど、システム・イメージの概要を決定した。即ち、

調査研究

- a. 文献データベースのフィールド構成
- b. 時代・地名・ジャンル・主題・文献分類などのコード表の作成
- c. 他のデータフィールド、キーワード辞書作成のための基礎的条件の検討
- d. c. に基づく具体的なファイル構成とリンクの方法の検討などを行い、検索用テーブルとしてキーワード辞書を中心におき、そこから各データベースにアクセスできるようなシステムを構想した。

(2) キーワード辞書作成のための基礎的条件の検討

文献データベースにアクセスする検索用テーブルであるキーワード辞書作成の基礎作業として、

- a. 美術史関係主要学術誌4誌（美術史・美術研究・国華・仏教芸術、1966～80年）所載文献に付されたキーワードの抽出（約6,000語）
- b. 暫定的なキーワード分類コードの作成
- c. 上記コードの入力

を行い、キーワード辞書モデル開発の基礎となるキーワード・データベースを作成し、美術史関係用語の一般的傾向について若干の検討を行った。

(3) パイロットモデルの作成

美術年鑑所載の日本東洋古美術関係文献の検索システムを作成した。

- a. 対象文献1984～87年の定期刊行物所載文献・タイトル数約150・レコード数約4000
- b. 検索項目論文名・著者・コード・キーワードなど
- c. 検索方式メニュー表示による絞り込み検索
- d. ローカルエリアネットワークを通じて各ターミナルからアクセス可能

などが、その主な内容である。

3. 美術史における画像処理技術の応用に関する研究

(1) デジタル画像処理による美術作品の分析方法の検討

- a. PC-9801をホストとする画像処理専用機（NEXUS6810）を応用して、画像処理の基本機能を複合する必要があるシミュレーション、分析、計測等の処理に関してルーチン化の手順、条件及び問題点の検討を行い、それらの成果を、デジタル画像処理の基本機能とグラフィック機能とを組合せた操作性のたかいパッケージソフトのメ

ニューの一部とした。(ヒストグラム、疑似カラー、濃度曲線等)

b. 従来の視覚的・光学的な作品分析の方法とデジタル画像処理とを複合した作品分析方法としては、X線写真や赤外線ビデオの画像に濃度変換の処理をくわえ、鮮明な画像を得る実験を行なった。また実体双眼顕微鏡からミクロの画像をとりこんで処理するための基本条件を検討した。

(2) 画像の蓄積に関わるデータベースシステム

画像情報を光ディスクに蓄積するとともに、画像情報と文字情報との有機的な結合を図るためのキーを検討し、以下のふたつのシステムについて、基本モデルの検討を行なった。

a. ホストコンピュータの市販データベース・ソフトからNEXUSの光ディスクに蓄積したカラー画像を呼びだす。

b. 調査において蓄積される写真資料や手書きの調書を電子ファイリングシステム(RIFILE)の光ディスクに蓄積するとともに、ホストコンピュータの市販データベース・ソフトをつかって管理するための基本モデルを検討した。

4. 絵巻物・肖像画の研究(米倉)

絵巻物については法然上人伝絵、就中拾遺古徳伝絵の調査を中心にを行い、また肖像画は室町時代に焦点をあてた。

拾遺古徳伝絵調査成果の一部は茨城県立博物館における講演で発表した。

5. 室町水墨画の研究(島尾・井手)

本年度は、室町水墨画研究会の共同調査として、以下の活動を行った。

(1) 関東水墨画の調査

栃木県立博物館(89年7月)、神奈川県立博物館(89年11月)、茨城正宗寺・茨城県立歴史館(90年2月)の各館において、関東水墨画を中心に調査を行った。

(2) その他

岡山県立美術館(89年8月)、山口県立美術館(89年8月)において、室町水墨画を中心に調査を行った。

(3) 調査結果の公表

調査結果は、90年7月の美術史学会東支部例会で基礎データを配布することとし、データの整理とデータベース化の作業を進めた。

調査研究

6. 請来絵画研究（井手）

香川県極楽寺所蔵の仏涅槃図及び白衣観音図の調査を行い、前者については研究成果を美術研究誌上に発表した。

7. 中国絵画研究（鶴田）

富岡鉄斎手録の解説を継続し、中国絵画関係及び来舶画人関係資料の調査を行った。天津芸術博物館並びに上海市博物館において明清絵画の調査を行い、南京師範大学、江蘇美術館において民国期美術教育及び展覧会資料の調査を行った。

8. 古代仏教彫刻研究（長岡）

科学研究費奨励研究（A）「八・九世紀木彫像の再検討—中国様式の受容と伝播という視点から—」により研究をすすめ（下記）、当該時代の木彫像及び比較作例として石像・金銅像について調査をおこなった。

○「八・九世紀木彫像の再検討—中国様式の受容と伝播という視点から—」（奨励研究A）研究代表者 長岡龍作

作品調査は、以下の各像についておこなった。

(A) 岡山県明王寺木造聖観音菩薩立像、奈良県普門院木造十一面観音菩薩立像、滋賀県盛安寺木造十一面観音立像、福岡県長谷寺木造十一面観音立像、大分県天福寺木彫群、長崎県法清寺木彫群

(B) 大分県天福寺塑造三尊像、兵庫県古法華石造三尊像、奈良県東大寺銅造八角灯籠音声菩薩像、同頭塔石仏群

本研究では、奈良末・平安初期の菩薩像を研究対象にすえ、そこに見られる外来影響の分析をおこない、様式の伝播と受容の具体相を考察した。上記(A)群はいくつかのレベルにおいて外来影響の及んでいると想定される作例であり、それは面貌表現・着衣表現・図像的特徴の各面において顕在化している。(B)群はそれらのうち特に着衣表現についての比較作品となる天平時代以前の作例である。

6. 国際調査研究

(1) 敦煌文化財保存修復に関する調査研究

1. 中国における研究

平成元年11月16日～12月1日に伊原恵司修復技術部長以下4名の研究者が敦煌を訪れ、日中共同で下記の調査、研究、協議を行った。

- (1) 194(195)窟と53(469)窟に設置した温度、湿度、日照計測システムからのデータの読み出しと初期解析。
- (2) 194窟への外部風速計、内部微風速計の設置と温・湿度センサー3台の増設。
- (3) 壁画劣化状態の実地調査と関連資料の調査。
- (4) 水質分析結果の検討と、岩石成分分析についての確認及び試料採取。
- (5) 今後の研究の進め方および人物交流についての協議。

2. 日本における共同研究または研究協議

- (1) 平成2年1月～3月李最雄、李雲鶴（ともに敦煌研究院保護研究所副所長）が来日し、壁画の構成成分と劣化現象および修復材料に関する調査研究を行った。
- (2) 平成2年2月樊錦詩（敦煌研究院副院長）以下3名が来日し、共同研究の進め方についての協議および関連調査を行った。

3. 第5回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議

平成元年10月19日、協力会議委員、文化庁関係者、東文研関係者が出席して東文研において開催され、次の議題について討議がなされた。

- (1) 第4回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議議事録（案）について。
- (2) 昭和63年度研究交流及びその後の状況について。
- (3) 平成元年4月訪中報告について。
- (4) 今後の共同研究の進め方について。
- (5) 平成元年度研究交流計画（案）について。
- (6) 共同研究班（ワーキンググループ）の設置について。

(2) 米国スミソニアン研究機構との共同研究

昭和63年5月16日に交わされた、文化庁大崎長官（当時）とスミソニアン研究機構

調査研究

アダムス長官との覚書に基づいて、昭和63年度から科学研究費（海外学術研究）による研究交流が始められたが、平成元年度からは引続き科学研究費による共同研究が進められるとともに国費も予算化され、運営のために東京国立文化財研究所に文化庁各機関から関係者を集めた日米研究交流委員会が発足した。また関係の研究者を集めたスミソニアン共同研究連絡会を別に作り、総括班の下に世話人として班長を一人ずつ定めたテーマ別の5班を置いて研究の円滑な推進を図ることとなった。共同研究連絡会は6月5日に、第1回研究交流委員会は12月8日に開催された。

平成元年度はアメリカ側から、バメラ・バンディバー、ボール・ジェット、トム・チェイスが来日し、縄文土器、鍍金試料についての共同研究を日本側研究者と行った。日本側からは、佐原真、沢田正昭、金子裕之、村上隆（以上奈良国立文化財研究所）、浅井和春（東京国立博物館）、平尾良光が渡米し共同研究を行なった。

7. 主要研究業績

- ①：著書・編書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表
⑤：講演・放送 ⑥：その他 平成1.4～平成2.3

美術部

関口正之（美術部長）

- ① 読本『釈迦御一代記図会』の仏伝図（北斎画）について

『日本絵画史の研究』吉川弘文館 1.10

- ③ 仏眼仏母図 「国華」1127 1.10

- ③ 法華堂根本曼陀羅（釈迦靈鷲山說法図） 「国華」1128 1.11

- ③ 大阪・長宝寺蔵仏涅槃図 「美術研究」347 2.3

- ④ 仏伝図表現の変容 - 「釈迦御一代記図会」について -

美術部・情報資料部公開学術講座 1.12

- ⑥ 二つの壁画-法隆寺 飛鳥白鳳の秘宝2- NHK教育TV 2.3

三宅久雄（第一研究室長）

- ③ 根津美術館蔵二仏並坐像他作品解説 『仏像集成1』 学生社 1.7

主要研究業績

三 輪 英 夫 (第二研究室長)

- ① 三宅克己「日本の水彩画14」 第一法現 1. 9
- ① 久米桂一郎日記(編・解説) 中央公論美術出版 2. 3
- ② 1892年の久米桂一郎「久米桂一郎とフランス展」図録 久米美術館 1. 10
- ③ 黒田清輝—その生涯と作品—「黒田清輝展」図録 茨城県近代美術館 1. 4
- ③ 作品解説他「黒田清輝」 アサヒグラフ別冊 朝日新聞社 1. 8
- ③ 作家略伝(青木繁他) 「近代日本美術事典」 講談社 1. 9
- ③ 作品解説(岡田三郎助「あやめの衣」他)
「昭和の洋画100選展」図録 朝日新聞社 1. 10
- ⑤ 黒田清輝—人と作品— 茨城県近代美術館 1, 5. 6

鈴 木 廣 之 (主任研究官)

- ② 伝説と古典—又兵衛浮世絵開祖説の再検討—
山根有三先生古稀記念会編『日本絵画史の研究』 吉川弘文館 1989. 10
- ③ 長谷川等伯「松林図」等作品解説
『日本美を語る』巻8—多彩なる墨趣— ぎょうせい 1989. 9
- ④ Screen Painting and *Kaisho*: The Milieu of Japanese Painting I, II
Department of East Asian Languages and Cultures, Columbia University 1990. 2, 3

井 上 一 稔 (第一研究室)

- ③ 千の手の功德 「仏像を旅する 奥羽線」 至文堂 1. 4
- ③ 仏像の姿さまざま 「仏像を旅する 山陰線」 至文堂 1. 6
- ④ 明徳寺・江国寺・西教寺聖観音像をめぐって 美術部・情報資料部研究会 1. 7

佐 藤 道 信 (第二研究室)

- ① 近代日本美術事典(共著) 講談社 1. 9
- ② 鑑画会 日本美術院百年史第1巻 1. 4
- ② 水墨の変容(承前) 「美術研究」345
- ② フェノロサとジャポニスム 「Lotus」10 2. 3
- ③ 鑑画会について 近代日本画の夜明け展図録 1. 4
- ③ 昭和の洋画 100選 作品解説・年表
昭和の日本画 100選 年表 朝日新聞社 1. 10

調査研究

- ③変容と創作のジャポニズム 日本フェノロサ学会会報 2. 2
- ③作品解説 花ひらく近代日本画展図録 2. 2
- ④水墨の変容 美術部・情報資料部研究会 1. 6
- ④フェノロサとジャポニスム 日本フェノロサ学会大会 1. 10

山 梨 絵美子 (第二研究室)

- ①近代日本美術事典 (河北倫明編 三輪英夫, 佐藤道信と共著) 講談社 1. 9
- ②黒田清輝の風景画小品をめぐって 黒田清輝展図録 茨城県近代美術館 1. 4
- ②光線画の源泉 版画芸術 66 1. 10
- ②西欧文化受容の歴史と黒田清輝 黒田清輝展図録 博物館明治村 2. 3
- ③昭和の洋画100選展 作品解説 22作家 朝日新聞社主催 1. 10
- ④黒田清輝の文学体験と作品に描かれたモチーフ 東京国立文化財研究所 総合研究会 1. 12
- ④アメリカにおける日本美術受容 美術部・情報資料部研究会 1. 12

芸 能 部

佐 藤 道 子 (芸能部長)

- ①醍醐寺の密教法会と建築空間に関する総合的研究 (共同執筆) 科学研究費研究成果報告書 1. 3
- ②遊行寺の年中行事 「仏教芸術」 185 1. 7
- ②法会と芸能—法会と年中行事 「仏教文化事典」 佼成出版社 1. 10
- ②法会と芸能—法会 「仏教文化事典」 佼成出版社 1. 10
- ②悔過法要の形式——成立と展開——その一 「芸能の科学」 18 2. 3
- ③悔過会とおこない 「図説日本の仏教」 6 新潮社 1. 12
- ⑤法会と鬼 国文学研究資料館 1. 4
- ⑤伝統の響き——声明—— 京都TV 1. 5
- ⑤お水取りの音 毎日放送TV 2. 3

羽 田 翔 (演劇研究室長)

- ④能楽—新しい潮流 芸能部夏期学術講座 1. 7
- ⑤「芸を聴く」 (2～5. 演目解説と清元志寿太夫, 竹本土佐広, 杵屋佐登代・今藤

主要研究業績

- 綾子、山彦節子との対談) 古今小劇場 1. 7～2. 1
- ⑥狂言「夷毘沙門」台本補綴 国立能楽堂定例公演 2. 1
- ⑥復曲能「武文」(再演)演出補佐 国立能楽堂特別企画公演 1. 8
- ⑥復曲狂言「竹松」演出 国立能楽堂研究公演 1. 12

鎌倉 恵子 (主任研究官)

- ①歌舞伎評判記集成第二期(翻刻 共同)第六卷～第八巻 岩波書店 1. 7～1. 11
- ②金平浄瑠璃小考—正本の挿絵を中心に— 「芸能の科学」18 2. 3
- ④延年への視点 立教大学日本文学大会 1. 7
- ④絵入浄瑠璃本と浄瑠璃絵尽し 芸能部公開学術講座「義太夫節の技法」 1. 12

廣瀬 美都 (演劇研究室)

- ①醍醐寺の密教法会と建築空間に関する総合的研究(共同執筆) 科学研究費研究成果報告書 1. 3
- ②儀礼と宗教の音楽 岩波講座「日本の音楽・アジアの音楽」別巻Ⅰ 1. 9
- ③法隆寺お会式 法隆寺聖霊院厨子絵展プログラム 1. 9
- ④醍醐寺の悔過会について 顕密仏教研究会 1. 6
- ⑤外来の仏教が日本の社会に如何に受容されたか 世田谷老人大学 1. 11

蒲生 郷昭 (音楽舞踊研究室長)

- ②長唄正本研究80～91(共同研究) 「邦楽と舞踊」466～477 1. 4～2. 3
- ②義太夫節「一谷嫩軍記」の段構成と「林住家の段」の音楽 「芸能の科学」18 2. 3
- ③雅楽概説 小野亮哉監修・東儀信太郎代表執筆『雅楽辞典』音楽之友社 1. 6
- ③琵琶と三絃 国立劇場第五十七回邦楽公演解説書 1. 6
- ③日本の雅楽「陵王」(「耳による日本の音楽・アジアの音楽」のうち) 岩波講座「日本の音楽アジアの音楽」別巻Ⅰ/付録 1. 9
- ③能楽「獅子」, 長唄「勸進帳」, 琴古流尺八本曲「巢鶴鈴慕」(「耳による日本の音楽・アジアの音楽」のうち) 岩波講座「日本の音楽・アジアの音楽」別巻Ⅱ/付録 1. 12
- ⑤義太夫節の音楽 芸能部公開学術講座「義太夫節の技法」 1. 12
- ⑥雅楽辞典(共同編集)

調査研究

小野亮哉監修・東儀信太郎代表執筆『雅楽辞典』音楽之友社 1. 6

⑥東洋音楽学会五十年雑史（四）——創立三十周年の前後——

（社）東洋音楽学会会報 第17号 1. 9

⑥文献資料（「日本の古典音楽資料へのアプローチ」のうち）

岩波講座「日本の音楽・アジアの音楽」別巻Ⅱ 1. 12

⑥岩波講座「日本の音楽・アジアの音楽」第7巻，別巻Ⅰ，Ⅱ（共同編集）

1. 4～1. 12

丸 茂 美恵子（音楽舞踊研究室）

②舞踊「傀儡師」における物真似の発想と展開 「芸能の科学」 18 2. 3

③「保名」ほか12曲（共同執筆） 関西舞踊華扇会プログラム 1. 10

③「北州」ほか4曲 至芸 「伝統のきわみ」プログラム 1. 12

④六代目菊五郎・おどりの系譜 舞踊学会 1. 11

⑥日本舞踊における娘形作品の技法研究（15～18）

「季刊 舞踊研究」49～52 1. 6～2. 3

⑥歌舞伎舞踊の研究（舞踊台本研究会8～19）

「邦楽と舞踊」466～477 1. 4～2. 3

⑥舞踊美を織る（36～47） 「邦楽と舞踊」466～477 1. 4～2. 3

⑥舞踊学関係文献目録（共編） 「舞踊学」12 2. 3

⑥芸と人（26～51 共同構成） テレビ東京 1. 4～1. 9

⑥至芸伝統のきわみ（共同構成） テレビ東京 2. 1

中 村 茂 子（民俗芸能研究室長）

③薄念仏会 仏教行事歳時記9月「放生」 1. 8

④芸能と扇 民俗芸能学会研究例会 2. 1

⑤民俗文化財の保護と問題点 長野県文化財管理者指導講習会 1. 11

三 村 昌 義（民俗芸能研究室）

②片袖幽霊譚の変容 「芸能の科学」18 2. 3

⑤江戸時代の庶民生活と火事 水橋消防記念同 2. 6

⑤越中俳壇の流れ—芭蕉と浪化上人 いしぶみの会 2. 9

⑥季題十二月 「插花」 2. 2～9

保存科学部

馬淵久夫（保存科学部長）

- ②表面電離型固体質量分析計 V G Sector の規格化について（平尾と共著）
「保存科学」28 1. 3
- ②青銅器の原料
「季刊考古学」27 1. 5
- ②完州上林里出土中国式銅劍の原料について（平尾と共著）
「明治大学考古学博物館館報」5 1.10

- ②鉛同位体比による青銅器原料産地の推定
第3回「大学と科学」公開シンポジウム公演収録集
「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」クバプロ 1.11

- ③福岡県出土青銅器の鉛同位体比（平尾と共著）
「考古学雑誌」75-4 2. 3

- ②鉄砲玉の化学的分析を通した一視点（田口，津金沢，平尾と共著）
「財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 研究紀要」7 2. 3

- ③大理石彫刻の科学的鑑定法（翻訳）
「サイエンス」8 1. 8

平尾良光（化学研究室長）

- ①地球化学，講談社サイエンティフィク（松尾禎士編）（分担執筆） 1. 5

- ②出雲国庁跡出土「和同開珎」の科学的調査（馬淵と共著）
「八雲たつ風土記の丘」96 1. 5

- ②上原5号墳出土耳環の科学的調査
「栃木県壬生町上原古墳群」日本窯業史研究所報告46 1. 5

- ②出雲国庁跡出土分銅の原料産地推定
「八雲たつ風土記の丘」99 1. 8

- ②非破壊蛍光X線分析法による有馬遺跡出土天部形立像
「有馬遺跡Ⅰ 奈良・平安時代編 大久保B遺跡
——関東自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第26集」 1. 8

- ②串木野地区に分布する石英・方解石脈中の金・銀および希土類元素
（佐々木，森下，斎藤，木村と共著）
「地球化学」23巻 1.12

- ②東海地方で出土した弥生時代および古墳時代青銅器の科学的調査（馬淵と共著）
「都田地区発掘調査報告書（下巻）」 2. 1

調査研究

- ②MOA美術館所蔵の黄銅製「王と王妃」像の調査（三浦，田中，鯨井と共著）
「保存科学」29 2. 3
- ②ICP分析法による銅製考古学的資料分析の基礎的研究（内田と共著）
「保存科学」29 2. 3
- ②自動制御マルチコレクター質量分析装置によるストロンチウム同位体比
の迅速精密定量（野津と共著）
「保存科学」29 2. 3
- ②新設脱塩装置について（青木，門倉，犬竹と共著）
「保存科学」29 2. 3
- ②可成寺金銅筒経当の保存修復研究（青木と共著）
「保存科学」29 2. 3
- ③掛川市深谷遺跡出土金属製品の保存修復研究（青木と共著）
「保存科学」29 2. 3
- ②鉄砲玉の化学的分析を通した一視点（田口，津金沢，馬淵と共著）
「群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要」7 2. 3
- ②蛍光X線法による化学組成の研究
「法隆寺献納宝物特別調査概報X」，「金銅仏 第6集」2. 3
- ③古代日本の青銅器の原料産地を訪ねて
「計測と制御」28 1. 8
- ⑤鉛同位体比からみた考古学
福岡大学理学部集中講義 1. 6
- 三浦 定 俊（物理研究室長）
- ②法隆寺献納宝物竜首水瓶の科学的調査（平尾と共著）
「MUSEUM」457 1. 4
- ②石仏の劣化とその保存に関する科学的研究
「福武学術文化振興財団昭和63年度年報」1. 10
- ②近赤外分光計測による絵画材料の同定と画像の復元に関する研究
「鹿島学術振興財団昭和63年度年報」1. 11
- ②敦煌莫高窟における気象観測(1)（西浦，李実，張▲軍と共著）
「保存科学」29 2. 3
- ②国指定史跡三殿台住居跡保護棟内の温湿度環境（川野邊，青木，今井と共著）
「保存科学」29 2. 3
- ②自記分光放射計を用いた展示用光源と材料の分光特性測定（佐野と共著）
「保存科学」29 2. 3
- ②MOA美術館所蔵の黄銅製「王と王妃」像の調査（平尾，田中，鯨井と共著）
「保存科学」29 2. 3

主要研究業績

- ③保存環境の評価と制御 「計測と制御」 28 1. 8
- ③レンブラントの銅板画 「計測と制御」 28 1. 8
- ④X線による二次電子放射を利用した壁画技法の調査
第6回センシングフォーラム 1. 4
- ④和紙など有機質文化財の光による劣化の定量的評価（第1報）
（佐野，馬淵と共著） 第11回古文化財科学研究会大会 1. 5
- ④赤外画像計測による日本古代絵画の研究
第12回鹿島学術振興財団研究発表会 1. 11
- ⑤文化財における非破壊計測とその現状 90設備診断技術シンポジウム 2. 3
佐野 千 絵（物理研究室員）
- ②自記分光放射計を用いた展示用光源と材料の分光特性測定（三浦と共著）
「保存科学」 29 2. 3
- ④和紙など有機質文化財の光による劣化の定量的評価（第1報）
（三浦，馬淵と共同） 第11回古文化財科学研究会大会 1. 5
新井 英 夫（生物研究室長）
- ③文化財の生物劣化とその防除に関する研究
（筑波大学平成元年度学術博士学位論文） 東京国立文化財研究所 2. 3
- ③文化財の劣化と真菌 「微生物」 5 1. 5
- ②紙質類文化財の保存に関する微生物学的研究（第9報）人為的foxingの誘起
「保存科学」 29 2. 3
- ②環境制御法を応用した資料保存 特集：図書館における資料保存
「早稲田大学図書館紀要」 32 2. 3
- ②保護棟内の生物被害について 横浜市三殿台考古館住居跡保護棟内遺構の
保存処理の調査・研究報告書 2. 3
- ③劣化と真菌 特集座談会（椿，柳，原口と共同） 「微生物」 5
- ③文化財の生物劣化国際会議への参加 「文化財の虫菌害」 17 1. 7
- ③ある図書館司書氏の質問に答えて 「文化財の虫菌害」 17 1. 7
- ④障壁画展示環境の風速分布について 第11回古文化財科学研究会大会 1. 5
- ④Foxing Caused by Fungi and Its Formation Mechanism

調査研究

5th International Symposium on Microbial Ecology 1. 8

④日光社寺建造物の生物学的調査

平成元年度文化財保存修復研究協議会 1. 10. 11

④Foxing の保存科学的研究

筑波微生物セミナー ワークショップ 2. 3

⑤古美術品の生物被害とその防除対策

古美術品の保存と展示法についてのセミナー 1. 7

⑤文化財の保存Ⅱ（生物劣化）

平成元年度指定文化財展示取扱講習会 1. 7. 11

⑤生物劣化

美術館・博物館保存担当学芸員研修会 1. 8

⑤文化財の微生物による被害とその防除（第11回文化財虫菌害保存研修会）

（財）文化財虫害研究所 1. 7

⑤文化財虫菌害防除作業主任者の研修と能力認定の講習会

（財）文化財虫害研究所 1. 10

⑤生物被害の取扱い

博物館資料取扱講習会（埼玉県） 2. 1

⑥文化財の保護と微生物

筑波大学第2学群 農林学系総合科目 1. 6

門 倉 武 夫（主任研究官）

①重要文化財戸隠神社本殿垂木に施された赤色顔料の分析結果

「重要文化財戸隠神社本殿修理工事報告書」 1

②文化財の保存・展示環境におけるNO₂濃度と染色布の変褪色への影響

「環境科学誌」 3(2)、 2. 3

②毘沙門堂彩色顔料の分析

「重要文化財園城寺唐院大師堂・唐門及び毘沙門堂修理工事報告書」 2. 3

②新設脱塩装置について（青木，平尾，大竹と共著）

「保存科学」 29 2. 3

文部省科学研究費重点領域研究

「文化財保存における大気環境の影響評価 代表者 柏木 希介」

「人間環境系研究広報，昭和63年度研究成果報告」 2. 3

石 川 陸 部（主任研究官）

⑤文化財の保存（環境）指定文化財（美術工芸）展示取扱講習会

東日本ブロック 1. 7

西日本ブロック 1. 11

主要研究業績

- ⑤セミナーの文化財展示収蔵環境 —韓国国立現代美術館— 1. 9
- ⑤博物館・美術館における展示環境制御
神奈川県博物館協会・神奈川県立博物館 1.12.15
- 山 野 勝 次 (生物研究室)
- ②亜鉛溶射皮膜のシロアリ忌避効力試験ならびに耐蟻性試験 「しろあり」76 1. 4
- ②ヤマトシロアリによる合板の耐蟻性試験 「しろあり」76 1. 4
- ②館山市で発見されたイエシロアリについて 「しろあり」77 1. 7
- ②金属溶射皮膜による防蟻処理 (第2報)
—土壌表面に溶射した亜鉛皮膜の防蟻性に関する室内実験—
「家屋害虫」11(2) 1.10
- ③プラスチック材料の劣化と真菌 「微生物」5(3) 1. 5
- ③羽アリの早期発見がカギ (シロアリ対策) 日本工業新聞 (6月20日) 1. 6
- ③シロアリ防除法について 「総合建築」216 1.10
- ⑤文化財の虫害と防除 (第11回文化財虫菌害保存研修会)
(財)文化財虫害研究所 1. 7
- ⑤シロアリの生態に関する実務的知識 (平成元年度しろあり防除施工士資格第2次指定講習会)
(社)日本しろあり対策協会 1. 9
- ⑤文化財虫菌害燻蒸処理標準仕様書ならびに危害防止措置規定について
(第9回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会) (財)文化財虫害研究所 1.10
- ⑤シロアリの生態に関する知識
(平成2年度しろあり防除施工士資格第1次指定講習会)
(社)日本しろあり対策協会 2. 1
- ⑤昆虫による文化財の被害と防除
(第11回文化財虫菌害防除作業主任者の能力認定試験とその講習会)
(財)文化財虫害研究所 2. 2
- ⑥シロアリと私 (4) 「文化財の虫菌害」17 1. 7
- ⑥地球の温暖化とシロアリ 「しろあり」78 1.10

調査研究

修復技術部

中里寿克

- ②米泉遺跡出土陶胎漆器及び籃胎漆器 金沢市米泉遺跡 1

- ④金色堂巻柱について 東文研 総合研究会 1

増田勝彦(第二修復技術研究室長)

- ③古代紙復元のための計測 計測と制御 Vol. 28, No. 8, 1. 8

- ⑤図書館・美術館の資料としての紙 文化財虫害研究所研修 1. 7

- ⑤史料の保存科学 平成元年度史料管理学研修会 1. 7

- ⑤紙製文化財の修復 美術館・博物館の保存担当学芸員研修 1. 8

- ⑤美術工芸品の材料及び技法(紙)
平成元年度指定文化財修理技術者講習会 1.11

- ⑤史料の保存科学 埼玉県文書館研修会 2. 3

- ⑥保存科学講義 東京農工大学 1. 8

- ⑥〔資料〕紙本の漂白—その簡単な化学と作業工程(Ⅲ) マガレット ヘイ著
＜英文和訳＞, 古文化財の科学, 第34号 1.12

川野邊 渉

- ①前近代の銅生産遺跡に関する基礎的研究 考古学と自然科学 21 2. 3

- ①遺跡探査法の再検討 考古学と自然科学 21 2. 3

- ⑤文化財における有機化学の役割 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 1. 7

- ⑤文化財の保存(劣化Ⅲ) 文化庁指定文化財展示取扱講習会 1.11

青木繁夫(第三修復技術研究室長)

- ②国指定史跡三殿台住居跡保護棟内の温湿度環境(三浦等と共著)
「保存科学」29 2. 3

- ②新設脱塩装置について(平尾等と共著) 「保存科学」29 2. 3

- ②可城寺金銅筒經当の保存修復研究(平尾と共著) 「保存科学」29 2. 3

- ②掛川市深谷遺跡湿度金属製品の保存修復(平尾と共著) 「保存科学」29 2. 3

- ④Stabilization of Archaeological Iron

13th International Symposium on the Conservation
and Restoration of Cultural Property 1.10

主要研究業績

- ⑤金属文化財の保存修復 博物館等保存担当学芸員研修 1. 8
- ⑤考古・民俗資料の修理 歴史民俗資料館等専門職員研修会 1.11
- 西 浦 忠 輝 (主任研究官)
- ①Experimental Study on the Consolidation of Fragile Porous Stone with Potassium Silicate for the Conservation of Cave Temples in China (李と共著)
Compilation of the Dissertation on Dunhuang Mogao Grottoes Conservation 1. 9
- ①A Test in the Selection of Reinforcing Materials for the Dunhuang Wall Paintings (李と共著) 同上 1. 9
- ②出土水浸木材の保存処理後の安定性〔第2報〕；環境湿度変化による寸法変化 (今津と共著) 「保存科学」29 2. 3
- ②敦煌莫高窟における気象観測(1)；1988年春の温度・湿度変化について (三浦, 李, 張と共著) 「保存科学」29 2. 3
- ③石造文化財の劣化と保存 「文化財の虫菌害」17 1. 7
- ③屋外石造文化財の劣化と保存 「マテリアルライフ」1-2 1. 9
- ④出土水浸木材の保存処理後の寸法変化に関する実験的研究 (今津と共同)
第11回古文化財科学研究会講演会大会 1. 5
- ④A New Method for the Conservation of Rock Reliefs
WFEO Technical Congress'89 in Prague 1. 9
- ⑤屋外石造文化財の保存について (社)日本工業技術振興協会 Polymers-in-Concrete 部会 1. 4
- ⑤海外における石造文化財の保存について
埋蔵文化財発掘技術者専門研修「保存科学過程」1. 6
- ⑤文化財の保存 (劣化Ⅲ：木, 金属, 石の劣化)
文化庁指定文化財展示取扱講習会 1. 7
- ⑤石造文化財の修復 博物館, 美術館等保存担当者研修 1. 8
- ⑤Conservation of Stone Objects in Japan; Some New Techniques
チェコ国立文化財研究所 1. 9
- ⑤石造文化財の保存と修復 群馬県立歴史博物館講演会 1.10
- ⑤敦煌莫高窟保存の日中共同研究について 同上 1.10

調査研究

- ⑥敦煌莫高窟保存に関する日中共同研究 「日本文化財科学会報」18 1.12

情報資料部

鶴田武良(情報資料部長)

- ③文化・美術の項 「中国年鑑」1989年版 中国研究所 1989.5

- ⑥雲岡石窟の補強と保護(翻訳) 中国石窟・雲岡石窟1 平凡社 1989.4

米倉迪夫(文献資料研究室長)

- ②聖と絵画 図説日本仏教の世界 第7巻(聖と救済) 集英社 1989 5.24

- ④拾遺古徳伝絵について 特別展「茨城の絵巻」記念講演会

茨城県立歴史館 1989 9.30

- ④作品と資料のリンク 科研「プロトコルの研究」発表

京都国立博物館 1989 12.4

- ④日本美術におけるカタログギングの歴史 科研「プロトコルの研究」発表

東京国立博物館 1989 2.15

- ⑥もう少し 人を、お金を—美術情報利用環境の現状とその将来—

アート・ドキュメンテーション通信 第4号 1990 1.25

島尾新(文献資料研究室員)

- ②十五世紀における中国絵画趣味 「MUSEUM」463 1989 10.1

- ②絵画作品リスト処理に関する基礎的な問題『美とかたち』

中森義宗・上村保子編 東信堂 1989 12.25

- ④対角線構図論—絵画のシンタックス—

東京国立文化財研究所総合研究会 1989 5.8

- ④雪舟の虚像と実像—画家イメージの形成— 東京国立文化財研究所美術部・情報
資料部公開学術講座 国立西洋美術館 1989 12.2

- ④日本の禅宗美術 仏教美術の会 1990 3.24

井手誠之輔(写真資料研究室員)

- ④美術史研究における画像処理の応用へむけて

美術部・情報資料部合同研究会 1989 4.12

- ③図版解説 香川極楽寺蔵 仏涅槃図 「美術研究」346 1990 3.20

主要研究業績

②美術史研究用画像処理パッケージソフトの開発とその紹介

科学研究費「美術史学研究支援画像処理モデルの開発」

報告書 1990 3

長 岡 龍 作（写真資料研究室員）

④菩薩像表現の規範性ー着衣表現を手がかりとしてー

美術部・情報資料部研究会 1989 11.15

Ⅳ．事 業

1. 出 版

(1) 美 術 研 究

平成元年度は第345号から第347号が下記の内容で刊行された。

美術研究 第345号 (平成元年11月)

武家肖像画の真の像主確定への諸問題 (上)

加 藤 秀 幸

水墨の変容 (承前)

佐 藤 道 信

鹿子木孟郎滞欧書簡 (二) (研究資料)

山 梨 絵美子

美術研究 第346号 (平成2年3月)

武家肖像画の真の像主確定への諸問題 (下)

加 藤 秀 幸

鹿子木孟郎滞欧書簡 (三) (研究資料)

山 梨 絵美子

香川・極楽寺所蔵仏涅槃図 (図版解説)

井 手 誠之輔

美術研究 第347号 (平成2年3月)

白描北野本地絵

真 保 亨

木岐道平の銅版画「神経血絡開現図」とエウスタキ解剖書

菅 野 陽

大阪・長宝寺蔵仏涅槃図 (図版解説)

関 口 正 之

(2) 日本美術年鑑

平成元年版 (平成2年3月発行)

昭和63年の内容をもつ。B5判280頁。

昭和63年美術界年史

美術展覧会 (現代美術・西洋美術)

美術展覧会 (東洋古美術)

美術文献目録 (定期刊行物所載) (現代美術・西洋美術)

美術文献目録 (定期刊行物所載) (東洋古美術)

物故者

(3) 芸能の科学

古典芸能についての研究論文、調査報告、資料翻刻等を掲載している。平成元年度は所属研究員による論考集を刊行した。

芸能の科学18 芸能論考 XI (平成2年3月発行)

片袖幽霊譚の変容

一謡曲「善知鳥」から上方落語「片袖」一まで
金平浄瑠璃小考—正本の挿絵を中心にして—
義太夫節「一谷嫩軍記」の段構成と「林住家の段」の音楽
舞踊「傀儡師」における物真似の発想と展開
悔過法要の形式—成立と展開—その一

三 村 昌 義
鎌 倉 恵 子
蒲 生 郷 昭
丸 茂 美恵子
佐 藤 道 子

(4) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究、受託研究報告等の論文報告および修復処置概報等を掲載している。平成元年度は第29号を発行した。

保存科学 第29号 (平成2年3月発行)

敦煌莫高窟における気象観測(1)—1988年春の温度・湿度変化について—

三 浦 定俊・西 浦 忠輝・李 実・張 拥 軍

国指定史跡三殿台住居跡保護棟内の温湿度環境

三 浦 定俊・川野邊 渉・青木 繁夫・今井 康博

自記分光放射計を用いた展示用光源と材料の分光特性測定

三 浦 定俊・佐野 千絵

紙質類文化財の保存に関する微生物学的研究 (第9報)

新井 英夫・松村 典孝・村北 宏之

MOA美術館所蔵の黄銅製「王と王妃」像の調査

三 浦 定俊・平尾 良光・田中 千秋・鯨井 秀伸

ICP分析法による銅製考古学的資料分析の基礎的研究

内田 哲男・平尾 良光

事業

自動制御マルチコレクター質量分析装置によるストロンチウム同位対比の迅速精密
定量 野津 憲二・平尾 良光

出土水浸木材の保存処理後の安定性〔第2報〕

—環境湿度変化による寸法変化(2)— 西浦 忠輝・今津 節生

新設脱塩装置について 青木 繁夫・平尾 良光・門倉 武夫・犬竹 和

可成寺金銅筒経当の保存修復研究(受託研究報告 第63号)

青木 繁夫・平尾 良光

掛川深谷遺跡出土金属製品の保存修復研究(受託研究報告 第64号)

青木 繁夫・平尾 良光

2. 黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作の多くを所蔵している本研究所は、黒田清輝の功績を記念し併せて
地方文化の振興に資するために、昭和52年度からの事業として黒田清輝巡回展を年
1回地方において開催してきた。

会 場 茨城県近代美術館

会 期 平成元年4月29日(土)～6月11日(日)

主 催 東京国立文化財研究所・茨城県近代美術館

開催日数 38日

入場者数 16,476人

陳列点数 油彩・パステル65点、木炭デッサン50点、写生帖17冊、書簡3点、

日記5冊、参考資料若干

図 録 A4判変型、196頁、原色図版107頁、単色図版20頁

3. 公開学術講座

美術部・情報資料部(第23回)

日 時 平成元年12月2日(土) 13:30～16:30

会 場 国立西洋美術館

講 演 (1) 雪舟の虚像と実像

—画家イメージの形成—

島 尾 新

(2) 仏伝表現の変容

—「釈迦御一代記図会」について—

関 口 正 之

芸能部 (第20回)

日 時 平成元年12月21日 (水) 18:00~20:30

会 場 矢来能楽堂

テーマ 義太夫節の技法

講 演 (1) 絵入浄瑠璃本と浄瑠璃絵し

鎌 倉 恵 子

(2) 義太夫節の音楽

蒲 生 郷 昭

(3) 実演と話—谷嫩軍記〈林住家の段〉—

浄瑠璃 豊竹呂大夫

三味線 野澤 錦弥

聞き手 蒲生 郷昭

4. 夏期学術講座

芸能部

芸能部においては、芸能の多角的かつ総合的な研究に資することを目的として、例年夏期4日間にわたる学術講座を、都内各大学の大学院生を対象に実施している。会場を東京国立文化財研究所会議室とし、芸能部員がそれぞれ専門分野における研究成果を体系的に論ずるかたちをとる。

平成元年度は「能楽—新しい潮流—」というテーマを設け、羽田昶が担当し、7月24日から27日までの4日間にわたり実施した。受講者は東京芸術大学、東京大学、お茶の水女子大学、国学院大学、国立音楽大学、武蔵野音楽大学、立教大学、実践女子大学、武蔵大学の各大学院生で、受講者数は18名。日程及びテーマ細目は下記のとおりである。

7月24日 (月)

序説—番外曲研究史—

能の復曲 — 1 — 能本の読み直しと古演出導入

能の復曲 — 2 — 番外曲の復活上演

7月26日 (火)

事業

能の復曲 — 3 — 承前

新作能の歴史と現状

狂言の復曲と新作狂言

7月26日(水)

演技空間の拡がり—野外能、劇場能、新設能楽堂等—

新演出・実験・試演—異流共演、照明能、蠟燭能等—

現代芸術との交流

7月27日(木)

婦人能の歴史と可能性

外国人の能楽研究と外国公演

討議

5. 博物館美術館等の保存担当学芸員研修

近年、地方においては博物館・美術館などの数が増加すると共にその施設が近代化し、燻蒸室、保存担当室、修復室などの保存に関する部門や施設設備が整備されて、学芸員のうちから、これら保存部門を担当する職員が配備されてきている。しかし、これらの職員が保存科学、技術の知識を修得しようとしても適切な学習の場や教材が無いのが実情である。そのため博物館、美術館などの学芸員で保存を担当するものに対して、文化財の科学的保存に関する基礎的な知識および技術について研修を行い、その資質の向上をもって文化財の保護に資することを目的とし研修会を開催した。受講者数23名。日程及び研修題目、講師は下記の通りであった。

8月21日(月)

オリエンテーション

保存科学概論

保存科学部長 馬淵 久夫

保存修復概論

修復技術部長 伊原 恵司

第二修復技術研究室長 増田 勝彦

8月22日(火)

文化財の分析化学

化学研究室長 平尾 良光

実習—燻蒸—

生物研究室長 新井 英夫

博物館美術館等の保存担当学芸員研修

文化財の生物劣化

—虫被害と対策—

新井英夫

8月23日(水)

漆芸品の修復

第一修復技術研究室長 中里寿克

文化財の照明

保存科学部主任研究官 石川陸郎

8月24日(木)

彩色材料

東京芸術大学教授 杉下龍一郎

温湿度の計測

物理研究室長 三浦定俊

実習—温湿度機器の補正—

三浦定俊

8月25日(金)

展示環境Ⅰ—環境と劣化—

保存科学部主任研究官 門倉武夫

見学—東京国立博物館施設—

門倉武夫

8月28日(月)

実習—光源の取扱い—

石川陸郎

展示環境Ⅱ

石川陸郎

石造文化財の修復

修復技術部主任研究官 西浦忠輝

8月29日(火)

金属文化財の修復

第三修復技術研究室長 青木繁夫

紙製文化財の修復

増田勝彦

実習

増田勝彦

8月30日(水)

文化財の有機化学

第二修復技術研究室 川野邊 渉

自由研修

8月31日(木)

科学写真の文化財への応用

三浦定俊

実習—X線撮影—

石川陸郎

9月1日(金)

実習

石川陸郎

文化財の修復と合成樹脂

名誉研究員 樋口清治

事 業

9月2日(土)

レポート作成・修了式

6. 会 議

文化財の保存および修復に関する研究のための国際研究集会

毎年秋、内外の文化財保存関係者の参加をえて、国際研究集会を行なっているが、本年は13回目を迎えることになり、「金属文化財の保存と修復における今日の問題」というテーマのもと修復技術部の担当で開催した。参加者は130名でブロンズ彫刻や考古資料などの金属文化財の腐食メカニズムやプラズマによる錆の安定化処理などについて活発な討議がされた。発表は海外8名、国内8名で、5セッションにわけて行なった。日程および発表題目は、以下の通りである。

名 称 The 13th International Symposium on the Conservation
of Cultural Property

—Current Problems in the Conservation of Metal Antiquities—

日 時 平成元年10月4日～6日

場 所 国立西洋美術館

(題名および発表者)

10月4日(水)

【セッション I】

1. The History of and Prospects for the Conservation of Metals in Europe

(ヨーロッパにおける金属遺物の歴史および保存の展望)

大英博物館 W・A・オデュー

2. Changes in the Conservation Treatment of Excavated Iron Objects in Japan

(日本における出土鉄器修復処置の変遷) 東京国立文化財研究所 樋口 清治

【セッション II】

3. Structure, Composition, and Deterioration of Unearthed Iron Objects

(埋蔵鉄製品の構造、組成およびその劣化) マンチェスター大学 S・ターゲース

4. Surface Chemistry of FeOOH Microcrystals

(FeOOH微結晶の表面化学)

千葉大学 金子 克美

5. A New Method for the Restoration of Archaeological Metallic Artifacts by Means of Low Pressure Plasma Treatment : The Development and the Present Status

(低圧プラズマ処理法による考古金属遺物の修復に関する新しい変遷と現状)

ミュンヘン大学 S・ヴェブレック

6. Stabilization of Archaeological Iron

(出土鉄製品の安定化)

東京国立文化財研究所 青木 繁夫

7. Desalting of Iron Objects Found in Inland area by Li OH Method

(水酸化リチウム法による内陸地域出土の鉄製遺物の脱塩処理)

奈良国立文化財研究所 肥塚 隆保

【セッション III】

8. Chemical Composition of Patina Bronze Objects

(青銅製品の錆と化学組成)

東京国立文化財研究所 平尾 良光

9. A Study on Methods for Determining the Efficiency of Dechlorination of Bronze

(青銅製品の脱塩効果判定法の研究)

復旦大学 楊 植 震

【セッション IV】

10. The Inhibition of Silver Tarnishing

(銀の変色防止法)

フィラデルフィア美術館 A・リンス

11. A New Treatment for Silverware

(銀製品の新しい処理法)

上海博物館 祝 鴻 范

12. Some thoughts on the Treatment of Ancient Silver

(古代銀製品の処理に関する考察)

フリア美術館 P・ジェット

【セッション V】

13. The Conservation of Bronze Bells Dotaku

—An Example of Sakuragaoka-Dotaku—

(銅鐸の保存処理 —国宝桜ヶ丘銅鐸の例—) 元興寺文化財研究所 内田 俊秀

14. Conservation and Restoration of Archaeological Artifacts Excavated from the

Okjon M3 Ancient Tomb in Korea

事 業

(韓国玉田M3古墳から発掘された考古遺物の修復) 湖巖美術館 李 午 熹

15. A New Technique for Removal of Corrosion products on Gilded Copper Alloy Artifacts

(金銅製遺物に関する腐食生成物の除去の新しい方法)

奈良国立文化財研究所 沢田 正昭

16. The Corrosion of Metal Objects in Storage and on Display

(収蔵および展示中の金属文化財の腐食)

大英博物館 W・A・オデュー

保存科学部・修復技術部

第18回文化財保存修復研究協議会

日 時 平成元年10月12日(木)

場 所 東京国立文化財研究所別館会議室

主 題 保存科学における生物学的諸問題

わが国の文化財の保存において、カビや虫による生物被害の問題はたいへん大きな問題である。特にそれらによる被害が深刻な問題となっている、文書や建造物について具体的な例を挙げて協議するとともに、樹木など生物による被害が修復の際に大きな問題となったアンコール遺跡の保存について特別講演を持った。

(講演題目及び発表者)

- (1) 各種木造文化財の樹種について

元国立科学博物館植物第一研究室

山 内 文

- (2) 書籍・古文書の生物劣化現象と修理について

宮内庁書陵部図書課文献専門官 森

懸

- (3) (特別講演) アンコール遺跡の保存の現状

上智大学アジア文化研究所客員教授 千 原 大五郎

- (4) 建造物修理に係る保存科学的諸問題

文化庁文化財保護部建造物課主任文化財調査官 村 上 詔 一

- (5) 日光社寺建造物の生物学的調査

東京国立文化財研究所保存科学部生物研究室長 新 井 英 夫

7. 国際・国内交流

(1) 職員の海外渡航

氏 名	渡 航 先	目 的	期 間	備 考
三宅 久雄	中華人民共和国 イギリス他	仏教彫刻作品の調査研究及び 資料収集	1. 3. 1~1.12.31	文部省在外 研究員旅費
山梨絵美子	アメリカ合衆国	スミソニアン研究機構博物館、 研究所における研究打ち合わせ	1. 3.30~1. 4. 8	外 国 旅 費
伊原 恵司	中華人民共和国	敦煌文化財保存修復に関する調 査研究	1. 4. 8~1. 4.21	〃
西浦 忠輝	〃	〃	〃	〃
門倉 武夫	アメリカ合衆国	屋外環境におけるブロンズ彫刻 の保存に関する研究集会に出席	1. 7. 7~1. 7.20	研 修
平尾 良光	〃	東アジア文化財とその原料につ いての鉛同位体分析のデータ ベース作成	1. 8.23~1. 9.22	科学研究費
山梨絵美子	〃	日本美術に関するコレクション の調査研究	1. 9. 3~1.12. 8	研 修 (フルブライト奨学金)
西浦 忠輝	ベルギー、チェ コスロバキア他	国際会議における講演及び石造 文化財の保存に関する調査研究	1. 9. 9~1.10. 2	研 修
鶴田 武良	中華人民共和国	天津芸術博物館及び上海博物館 所蔵の絵画を中心とした調査	1. 9.16~1. 9.24	研 修 (日中友好会)
石川 陸郎	大韓民国	「美術館々内保存環境のあり 方」セミナーに出席	1. 9.17~1. 9.24	研 修 (韓国国際文化協会)
伊原 恵司	中華人民共和国	敦煌文化財保存に関する調査	1.11.16~1.12. 1	科学研究費
増田 勝彦	〃	〃	〃	〃
西浦 忠輝	〃	〃	〃	〃
三浦 定俊	〃	〃	〃	外 国 旅 費

事業

井手誠之輔	台湾	国立故宫博物院所蔵の中国絵画に関する調査研究	1.11.17~1.11.24	研修
鶴田 武良	中華人民共和国	近代中国絵画史に関する調査	1.12. 5~1.12.24	〃
鈴木 廣之	アメリカ合衆国 イギリス他	16~19世紀日本絵画に関する調査研究	2. 1. 9~2.11. 7	文部省在外 研究員旅費
増田 勝彦	タイ	タイ国立博物館において紙製文化財の保存に関する研修を実施	2. 1.16~2. 2. 9	先方負担 (ユネスコ)
井上 一稔	アメリカ合衆国	米国所蔵日本美術作品の調査	2. 2.13~2. 2.28	研修
島尾 新	〃	〃	〃	〃
井手誠之輔	〃	〃	〃	〃
西浦 忠輝	イギリス, ペル ギー他	ヨーロッパにおける石造文化財の保存に関する調査研究	2. 3.31~2. 9.29	文部省在外 研究員旅費

(2) 海外研究者の来訪

平成元年4月1日～平成2年3月31日

年 月 日	国 名	所 属 ・ 氏 名
1. 5. 22	ベ ト ナ ム	ハノイ大学教授 Phan Huy LE
6. 21	ボ リ ビ ア	ボリヴィア文化協会会長 テレサ・ヒスベルト
8. 24	中 国	上海同済大学助教授 魯 晨 海
10. 20	イ タ リ ア	「L'Espresso」紙在米通信員 マウロ・カラマンドレイ
11. 7	中 国	復旦大学訪日団 湯 綱 団長他3名
11. 17	韓 国	韓国文化財管理担当官訪日団 南 相 浩 団長他26名
12. 6	中 国	陝西省文物保護視察団 陳 全 方 団長他3名
2. 1. 19	モ ン ゴ ル	文化省附属文化・芸術研究所長 ソノミン・ルプサンワンダン
1. 29	韓 国	湖巖美術館保存科学研究室 金 寿 起
2. 6	ト ン ガ	教育省管理部首席教育官 ヒエラケバ・ツナカイマス
3. 28	タ イ	タイ国教育省事務次官官房外事部長 ボーンニバ・ソムババヨム タイ国教育省外事部国際機関係長 ウラジャッタ・チャオチャラコルン

事業

(3) 招へい研究員

昭和53年度より招へい研究員制度が設けられ、平成元年度は国外11名、国内2名の研究員を招へいし、下記のように共同研究が行われた。

国外招へい研究員

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
ボール・ジェット	米 国	フリヤー美術館 主任研究員	1.10. 1 ～1.10.14	金銅製品の保存修復研究	第三修復技術研究室長 青木繁夫
スタン・ペプチェフ	西 独	ミュンヘン大学教授	1.10. 2 ～1.10.21	プラズマによる金属遺物の安定化研究	〃
李 午 憲	韓 国	湖巖美術館 保存室長	1.10. 3 ～1.10.23	金属遺物の安定化処理研究	〃
ゲアハルト・バニク	オーストリア	オーストリア国立国会図書館保存部長	1.10.18 ～1.10.31	書籍の脱酸性・強化処理	第二修復技術研究室長 増田勝彦
李 最 雄	中 国	敦煌研究院保護研究所副所長	2. 1.16 ～2. 3.20	彩色顔料の組成及び物性に関する科学的研究	修復技術部長 伊 原 恵 司
李 雲 鶴	〃	〃	〃	〃	〃
馮 宗 游	中 国	陕西省考古研究所副研究員	2. 2.19 ～2. 2.28	織物および漆器の保存修復研究	保存科学部長 馬 淵 久 夫
韓 偉	〃	〃	〃	〃	〃
樊 錦 詩	中 国	敦煌研究院副院長	2. 2.14 ～2. 2.25	日本と中国の文化財保存修復事業について協議	修復技術部長 伊 原 恵 司
段 修 業	〃	同 館員	〃	〃	〃
黄 克 中	〃	国家文物局保護研究所主任	〃	〃	〃

国内招へい研究員

氏 名	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
内 田 哲 男	名古屋工業大学 助教授	1. 7.17 ～1. 8.16	I C P測定に関する基礎的研究	化学研究室長 平尾良光
冷 泉 勝 彦	大手前女子大学 助教授	1. 8.21 ～1. 9. 9	鉄斎手録にみる明治期京都画壇について	情報資料部長 鶴田武良

V. 研究施設・設備

1. 蔵 書

美術関係図書

日本・東洋古美術，日本近代・現代美術，西洋美術の全般にわたる研究書を中心に，関連図書，各種叢書，辞典類など（和漢書 39,593），洋書（4,051），計43,644冊のほか，各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書，美術関係雑誌，紀要類，売立目録，展覧会目録などを所蔵し，所内及び所外の研究者の利用に供している。

芸能関係図書

雅楽・寺事・能・歌舞伎・文楽・邦楽・民俗芸能・寄席芸，その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書8,630冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報（第1次）・テアトロ（第1次）・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌，それに声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

保存科学・修復技術関係図書

古来の伝統的生産及び工芸技術書，技術史，又は数少ないそれらの科学的究明を試みたもの，修理工事報告書及び・物理学・生物学部門の保存科学に関連ある和洋書を合わせて2,996冊を所蔵している。

本年度における収書数と総計は次表のとおりである。

区 分	美 術 関 係		芸 能 関 係		保存科学・修復技術関係		計
	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	和漢書	洋 書	
元 年 度	347冊	9冊	164冊	9冊	33冊	11冊	573冊
総 数	39,593々	4,051々	8,519々	111々	1,985々	1,011々	55,270々

資 料

2. 資 料

美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成整理と、購入写真、複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をもおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画、書蹟、彫刻、工芸、建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ26万点、原板保有量はほぼ3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム255巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と、図書カード、図版カード、各種索引類など多数。

芸能関係資料

レコード・録音テープ・写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには、毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真・テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。種別による所蔵数は次のとおりである。

区 分	レコード	録 音 テ ー プ		シネフィルム		ビ デ オ テ ー プ
		従来方式	PCM方式	3 mm	16 mm	
元 年 度	8本	24本	54本	0本	0本	23本
計	7,118ヶ	2,838ヶ	232ヶ	198ヶ	4ヶ	225ヶ

3. 黒田記念室

黒田記念室，本研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり，黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵している。

創立当時，主として黒田家から寄贈されたものは，油絵126点，素描170点，写生帖等であるが，その後黒田照子夫人，樺山愛輔，田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは，「知・感・情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」などである。

4. 閲覧室

本研究所情報資料部の図書写真及び各種研究資料は，主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等の利用に供している。年間の閲覧者数は，約313名である。

VI. 関係法規

◎文部省組織令抄（昭和59年 政令第227号 最終改正 昭63政101号，197号）

第2章 文化庁

第3章 施設等機関

（施設等機関）

第108条 文化庁長官の所轄の下に，文化庁に国立国語研究所を置く。

2. 前項に定めるもののほか，文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

（国立文化財研究所）

第114条 国立文化財研究所は，文化財に関する調査研究，資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2. 国立文化財研究所には，支所を置くことができる。

3. 国立文化財研究所及びその支所の名称，位置及び内部組織は，文部省令で定める。
（研究施設の指定）

第115条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は，法第5条第37号に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則抄（昭和28年 文部省令第2号 最終改正 昭63文令12号，文令26号，文令28号）

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

（名称及び位置）

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第1款の2 東京国立文化財研究所

(所 長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2. 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課及び次の五部を置く。

- (1) 美術部
- (2) 芸能部
- (3) 保存科学部
- (4) 修復技術部
- (5) 情報資料部

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- (1) 職員の人事に関する事務を処理すること。
- (2) 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- (3) 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- (4) 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- (5) 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- (6) 庁内の取締りに関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属しない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

2. 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

関係法規

3. 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

2. 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
3. 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
4. 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の三室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

2. 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析化学的調査研究を含む。）を行い、並びにその結果の公表を行う。
3. 物理研究室においては文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
4. 生物研究室においては文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

2. 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
3. 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
4. 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

2. 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料（写真資料を除く）の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。
3. 写真資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

東京国立文化財研究所要覧（平成元年度）

平成3年7月1日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110 東京都台東区上野公園13-27
電話 (3823) 2241 (代表)

本文中に誤りがありましたので下記のように訂正下さい。

ページ	行	誤	正
p 7	31	調査研究員（非）広瀬美都	調査員（非）広瀬美都
p 7	33	調査研究員（非）丸茂美恵子	調査員（非）丸茂美恵子
p 7	35	調査研究員（非）三村昌義	調査員（非）三村昌義
p 8	10	調査研究員（非）山野勝次	調査員（非）山野勝次
p28	20	．．．加わったものでわ	．．．加わったものであ
p37	10	．．．X線回分析をう予定	．．．X線分析を行う予定
p56	23	（．．，張▲軍と共著）	（．．，張掬軍と共著）
p59	2	⑤セミナーの文化財展示．．	⑤セミナー 文化財の展示
p60	18	①前近代の銅生産遺跡	②前近代の銅生産遺跡
p60	19	①遺跡探査法の再検討	②遺跡探査法の再検討